六部山古墳群発掘調査概要報告書

― 六部山5・41・42・43・44号墳の調査 ―

1991

鳥取市教育委員会

六部山古墳群発掘調査概要報告書 ―六部山五・四一・四二・四三・四四号墳の調査― 一九九一 鳥取市教育委員会

序　　文

この発掘調査報告書は、平成２年度に国・県の補助金を受けて実施した六部山古墳群の発掘調査記録です。

鳥取市内には数多くの原始・古代遺跡があり、近年の各種開発事業の増加とともに発掘調査が必要となり、消えていく遺跡も増えています。しかしながら、埋蔵文化財は地域の先人の生活を語る歴史資料であり、後世に継承していくべき貴重な市民の財産です。このような認識のもと、鳥取市教育委員会では開発と文化財の共存をはかるべく、関係各機関との協議を重ね、また地元の方々の深いご理解をいただきながら文化財保護行政を進めているところです。

調査を実施いたしました六部山古墳群は、鳥取県東部で最古の前方後円墳を有する古墳群として著名な古墳群です。今回の発掘調査では５基の円墳が姿を現し、類例の少ない須恵器などが出土いたしました。ここに、多大な成果を得て報告書刊行のはこびとなりました。ささやかな冊子ではありますが、市民各位ならびに関係各位のご利用に供していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただいた土地所有者ならびに事業者、関係各位に心から感謝申し上げる次第です。

平成　３　年　３　月

鳥取市教育委員会

教育長　田中哲夫

例　　言

1．本書は、平成２年度に国・県の補助金を得て鳥取市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2．発掘調査を実施した遺跡は、鳥取市久末字六部山571番地に所在する六部山５･41･42･43･44号墳である。

3．調査の期間は、平成２年４月20日から平成３年３月20日である。

4．発掘調査事業の実施にあたっては、下記の関係者、関係機関の協力と指導助言をいただいた。

谷口進　谷口秋喜　山名巌　鳥取県教育委員会文化課　鳥取県埋蔵文化財センター　鳥取市遺跡調査団

また、現地調査、本書作成にあたっては、山田真宏、杉谷美恵子、谷口恭子氏ほか多くの方々に助言・協力をいただいた。記して謝意を表したい。

5．本書に用いた方位は遺跡分布図を除き磁北を示し、レベルは海抜標高である。

6．本書では、以下のとおり遺構、遺物にたいして略号を使用している。

掘立柱建物跡：ＳＢ　溝状遺構：ＳＤ　土坑(状)遺構：ＳＫ　柱穴：Ｐ　鉄製品：Ｆ

7．発掘調査によって作成された記録類及び出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管されている。

8．発掘調査の体制は、下記のとおりである。

発掘調査主体　鳥取市教育委員会　教育長　田中哲夫

事　務　局　鳥取市教育委員会　社会教育課 文化係

調査担当者　平川　誠　前田　均

現地作業　武田勝義　丹波千恵野　平林包雄　福田孝子　福田藤蔵

福田三男　松本一枝　松本隆徳　森本サツエ　森本豊実

目　　次

序　文
例　言
Ⅰ　発掘調査の経過 …… 1
Ⅱ　歴史的環境過 …… 2
　1．位置と歴史的環境 …… 2
　2．六部山古墳群 …… 4
Ⅲ　発掘調査の概要 …… 7
　1．調査古墳の概要 …… 7
　2．六部山５号墳 …… 7
　3．六部山41号墳 …… 12
　4．六部山42号墳 …… 14
　5．六部山43号墳 …… 16
　6．六部山44号墳 …… 19
　7．古墳築造以前の遺構 …… 19
Ⅳ　小結 …… 26

図 版 目 次

図版1　1.調査地遠景(北西から)　2.調査地遠景(北から)
　3.調査前の調査地全景(南から)　4.調査地全景(南から)
図版2　1.六部山５号墳調査前(北東から)　2.同　調査後(南から)
　3.同　墳丘断面(西から)　4.同　周溝埋土状況(南から)
図版3　1.六部山５号墳埋葬施設検出状況(南から)　2.同　埋葬施設完掘状況(南から)
　3.同　埋葬施設内遺物出土状況(東から)　4.同　埋葬施設内遺物出土状況部分(東から)
図版4　1.六部山41号墳調査前(東から)　2.同　調査後(南から)
　3.同　周溝埋土状況(西から)　4.同　周溝内遺物出土状況(南から)
図版5　1.六部山42号墳調査前(南東から)　2.同　墳丘・周溝検出状況(南から)
　3.同　調査後(南西から)　4.同　周溝埋土状況(北西から)
図版6　1.六部山42号墳周溝内埋葬施設(南から)　2.同　周溝内埋葬施設(北から)
　3.同　周溝内埋葬施設完掘後(東から)　4.同　周溝内埋葬施設遺物出土状況(北から)
図版7　1.六部山43号墳調査後(北から)　2.同　周溝埋土状況(北から)
　3.六部山44号墳調査後(北西から)　4.同　周溝埋土状況(東から)

図版8　1.六部山５号墳墳丘下遺構全景(南から)　2.同　(東から)
3.ＳＢ０１(南東から)　4.ＳＢ０２、ＳＢ０３(南東から)
図版9　1.ＳＢ０３－Ｐ４検出状況(北から)　2.ＳＢ０４(東から)
3.ＳＫ０２(南から)　4.ＳＫ０２遺物出土状況部分(北から)
図版10　1.六部山42号墳墳丘下遺構全景(南東から)　2.ＳＢ０５・ＳＫ０５(南から)
3.六部山42号墳墳丘下遺物出土状況(1)　4.同　(2)
図版11　1.六部山42号墳墳丘下柱穴検出状況　2.六部山44号墳墳丘下遺構全景(南西から)
3.ＳＫ０１(北から)　4.同　遺物出土状況部分(東から)
図版12　六部山５号墳出土遺物
図版13　六部山41・42号墳出土遺物

挿図目次

第１図　鳥取市南東部遺跡分布図 …… 3
第２図　古部家古墳群・六部山古墳群分布図(部分) …… 5
第３図　六部山３号墳 …… 6
第４図　六部山５・44号墳墳丘実測図 …… 8
第５図　六部山５墳埋葬施設実測図 …… 9
第６図　六部山５墳出土遺物実測図(１) …… 10
第７図　六部山５墳出土遺物実測図(２) …… 11
第８図　六部山41号墳墳丘実測図 …… 13
第９図　六部山41号墳出土遺物実測図 …… 14
第10図　六部山42・43号墳墳丘実測図 …… 15
第11図　六部山42号墳出土遺物実測図 …… 16
第12図　六部山42号墳周溝内埋葬施設実測図 …… 17・18
第13図　古墳築造以前遺構配置図 …… 20
第14図　ＳＢ０１実測図 …… 21
第15図　六部山５号墳墳丘下遺構実測図 …… 23・24
第16図　ＳＢ０５・ＳＫ０５実測図 …… 25
第17図　六部山５・41・42・43・44号墳地形実測図 …… 27・28
第18図　六部山５・44号墳墳丘断面図 …… 29・30
第19図　六部山41・42・43号墳墳丘断面図 …… 31・32

Ⅰ　発掘調査の経過

今回発掘調査を実施した六部山５、41、42、43、44号墳は、鳥取市久末字六部山に所在する。発掘調査の契機は、鳥取市久末在住の谷口進氏の計画する農地改良事業によるものである。この事業は、鳥取市久末字六部山の丘陵地に拓かれた果樹園約3,500㎡を改良し、果樹の更新と作業効率の改善をはかることを目的としていた。平成元年秋に事業計画について相談を受けた鳥取市教育委員会では、さっそく現地の踏査をおこないこの事業計画地に所在する埋蔵文化財の確認を行なった。現地は久末集落の南東500ｍの県道鳥取郡家線に沿った丘陵の先端部で、隣接する東側の丘陵には鳥取県東部最古の前方後円墳といわれる六部山３号墳があり、周辺にも多くの古墳が分布する地域である。

事業計画地は、平野部に舌状に突き出した丘陵末端の広いゆるやかな尾根となっている。地権者の話では、大正年間に開拓され二十世紀梨の果樹園として利用されてきたということで、長い間の耕作による地形変化がうかがえた。しかし、踏査では『改訂・鳥取県遺跡地図－第1分冊－』に記載されている１基(六部山５号墳)のほか、２基の古墳を新たに確認した。その他、この分布踏査によってわずかに丘陵斜面に張り出す２ヵ所の古墳状隆起地形や土器片の散布も明らかとなった。このため鳥取市教育委員会では、これら埋蔵文化財の保護・保存方法について事業者と協議を進めることとなった。しかし、事業者の事業実施の意志が固く、また苗木の植栽時期の関係もあり、発掘調査は避けられないものとなった。このため、造成工事による削平などによって古墳の現状が改変されるおそれのある古墳ついて、発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、鳥取県教育委員会の指導を得て鳥取市教育委員会があたることになり、平成２年４月20日から開始した。資材搬入、地形測量等の諸準備ののち、農地改良事業地内の正確な古墳の数と規模および遺存状況を確認するためトレンチによる確認調査を実施した。このトレンチ調査の結果、踏査時に確認していた古墳状隆起地形も墳丘を失った古墳であることが判明し、発掘調査対象古墳は５基となった。その後順次各古墳の表土除去を行ない埋葬施設、周溝等の調査を実施した。また同時に各調査工程ごとに実測、写真撮影等を行ない記録を作成し調査を進めていった。調査も最終段階となり、５号墳墳丘盛土の除去を実施したところ墳丘盛土下から弥生時代の掘立柱建物等が検出されたため、あわせて調査を実施した。このような経過のなかで７月10日までにはほぼ現地での作業を終了することができ、最終的な発掘調査面積は1,695㎡となった。その後、整理、報告書作成作業を順次行ない平成３年３月20日をもって発掘調査事業を終了した。

なお、６月30日には現地で発掘調査説明会を行ない、地元久末地区の皆さんを中心として約75名の参加を得ることができた。

Ⅱ　歴史的環境

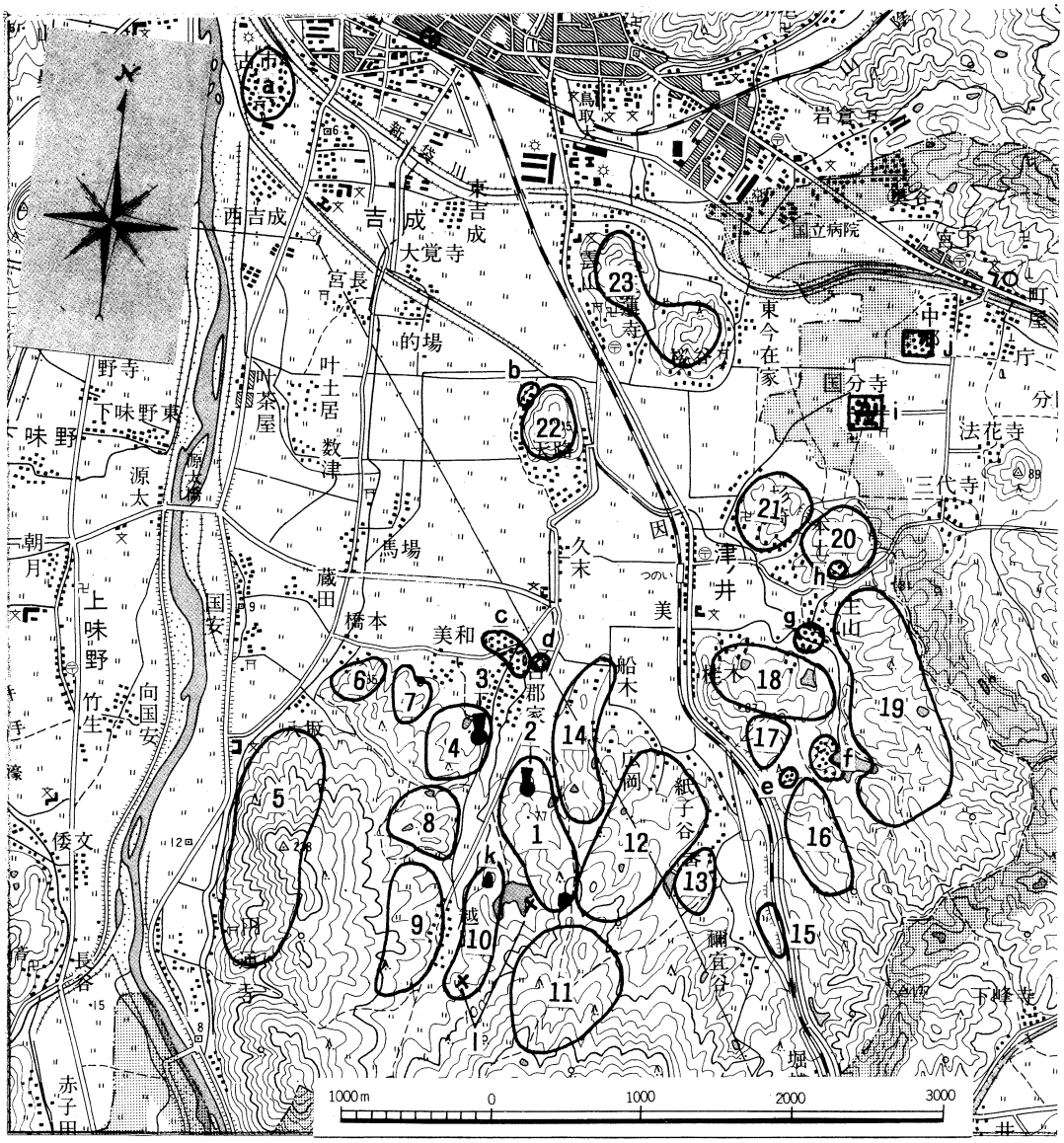
1．位置と歴史的環境

六部山古墳群は、鳥取市街地から南へ6㎞ほど離れた久末、古郡家集落の南東に位置する丘陵地に展開している。この北面する標高30～100m前後の低丘陵は、鳥取市と郡家町を界する空山（標高340m）につづいている。この丘陵はいくつもの尾根が枝分かれし、入りくんだ地形となっている。周辺の丘陵は、地質学的には円通寺礫岩層や粘土層及び安山岩を含むローム層からなっており、礫と粘土が互層となった露頭も随所で見ることができる。丘陵間の小平野は緩やかな傾斜で鳥取平野中央部へとつながっていく。鳥取平野は、中央を流れる千代川やその支流である袋川、大路川などによって運ばれた土砂によって形成された沖積平野である。この肥沃な平野は、古代から現代に至るまで人々の生活を支える重要な生産基盤となっている。

久末の集落は、越路奥の空山山塊に源を持つ大路川が形成した小扇状地に立地する。大路川を挟んで西側の丘陵裾部には、古郡家集落が隣接して営まれている。集落前面の平野部で水稲栽培が、丘陵部では梨を中心とする果樹栽培が盛んに行われている。久末は、かつて因幡国邑美郡に含まれ、明治時代以降久末村、三戸古村、米里村を経て、町村合併によって1955年（昭和30）からは鳥取市の大字となり現在に至っている。

久末集落の所在する鳥取平野南部の縄文・弥生時代の遺跡は、現在のところあまり知られていない。縄文時代の遺跡としては、河川改修時に古郡家地内から発見された大路川遺跡が知られているのみである。晩期前半の土器とともにトチ、アラカシといった堅果類の貯蔵穴が見つかっている。続く弥生時代の遺跡では、最も古い集落遺跡として前期末～中期初頭の土器類が出土した西大路土居遺跡があり、掘立柱建物跡が検出された久末・古郡家遺跡が中期～古墳時代まで断続して営まれたようである。この他、後期後半～古墳時代にかけての竪穴住居跡が多数検出された生山大池遺跡などが知られている。また墳墓遺跡としては、弥生時代後期に属するいわゆる墳丘墓2基が紙子谷遺跡門上谷地区で調査されている。そのほか、越路の樹園地内からは流水文銅鐸が出土している。

古墳時代に入ると、この地域の丘陵地帯には大小様々な古墳が築造され、市内でも有数の古墳密集地帯を形成するようになる。古墳時代前・中期を代表する古墳としては、特異な埴輪、変形獣首鏡が出土した六部山3号墳（全長63m）、異形銅鏡、短甲などが出土した古郡家1号墳（全長90m）などの大型前方後円墳があり、鳥取平野南部の首長墓と考えられている。このほか、前・中期の古墳として、小規模な方形墳や円墳が近年明らかになってきた。丘陵頂部や稜線上に比較的まとまりをもって築造され、主として木棺、箱形石棺を埋葬施設としている。副葬品は多くないが、一部の古墳からは小型の鏡、玉、鉄製工具が見つかっている。後期になると、丘陵斜面や丘陵裾に立地し、横穴式石室を埋葬施設とした円墳群が築造されるようになる。後期群集墳と呼ばれるこの時期の古墳として、91基の古墳で構成される空山古墳群が良く知られている。この古墳群には、石室の壁に



第１図　鳥取市南東部遺跡分布図

1．六部山古墳群	2．六部山３号墳	3．古郡家１号墳	4．古郡家古墳群
5．八坂古墳群	6．橋本古墳群	7．美和古墳群	8．園原古墳群
9．越路古墳群	10．越路古墳群	11．空山古墳群	12．広岡古墳群
13．香取古墳群	14．船木古墳群	15．禰宜谷古墳群	16．紙子谷古墳群
17．海蔵寺古墳群	18．桂木古墳群	19．生山古墳群	20．津ノ井古墳群
21．杉崎古墳群	22．大路山古墳群	23．面影山古墳群	
a．古市遺跡	b．西大路土居遺跡	c．久末・古郡家遺跡	d．大路川遺跡
e．紙子谷遺跡	f．生山大池遺跡	g．生山遺跡	h．津ノ井字祢遺跡
i．因幡国分寺跡	j．因幡国府跡	k．越路銅鐸出土地	l．越路古窯跡群

鳥、木、葉、舟、幾何学文などの線刻を有する古墳があり、「中高天井」の石室構造とともにこの地域の後期古墳の特徴となっている。広岡古墳群にも弓を引く武人の線刻のある11号墳（坊ケ塚古墳）がある。横穴式石室を採用する後期古墳は、すでに開口しているものが多く副葬品の明らかな古墳は少ないが、近年発掘調査された広岡古墳群からは、多数の副葬品とともに金銅装圭頭大刀や刀装部に銀象嵌を施した大刀が出土している。この他の後期古墳として、家形石棺の残る橋本古墳、馬鐸などの馬具が出土した六部山１号墳などが注目される。

古墳時代の集落は古墳ほど実態解明が進んでおらず、これまでにわかっている遺物散布地などから丘陵上や現在の集落に重なって存在するものと考えられる。調査された遺跡は、弥生時代から継続して営まれた古墳前期の集落遺跡がほとんどで、中・後期では竪穴住居跡３棟を検出した広岡西矢谷遺跡が貴重な調査事例となっている。その他、古墳時代に関連する重要な遺跡として越路窯跡群があげられる。大路川右岸の丘陵地に展開する須恵器窯跡群で、古式の須恵器も採取されている。

律令時代になると鳥取南部の地域は、因幡国邑美郡、法美郡に組み込まれる。法美郡に因幡国府が置かれたことからも、この地域が早くから因幡国の中心となっていたと考えられる。

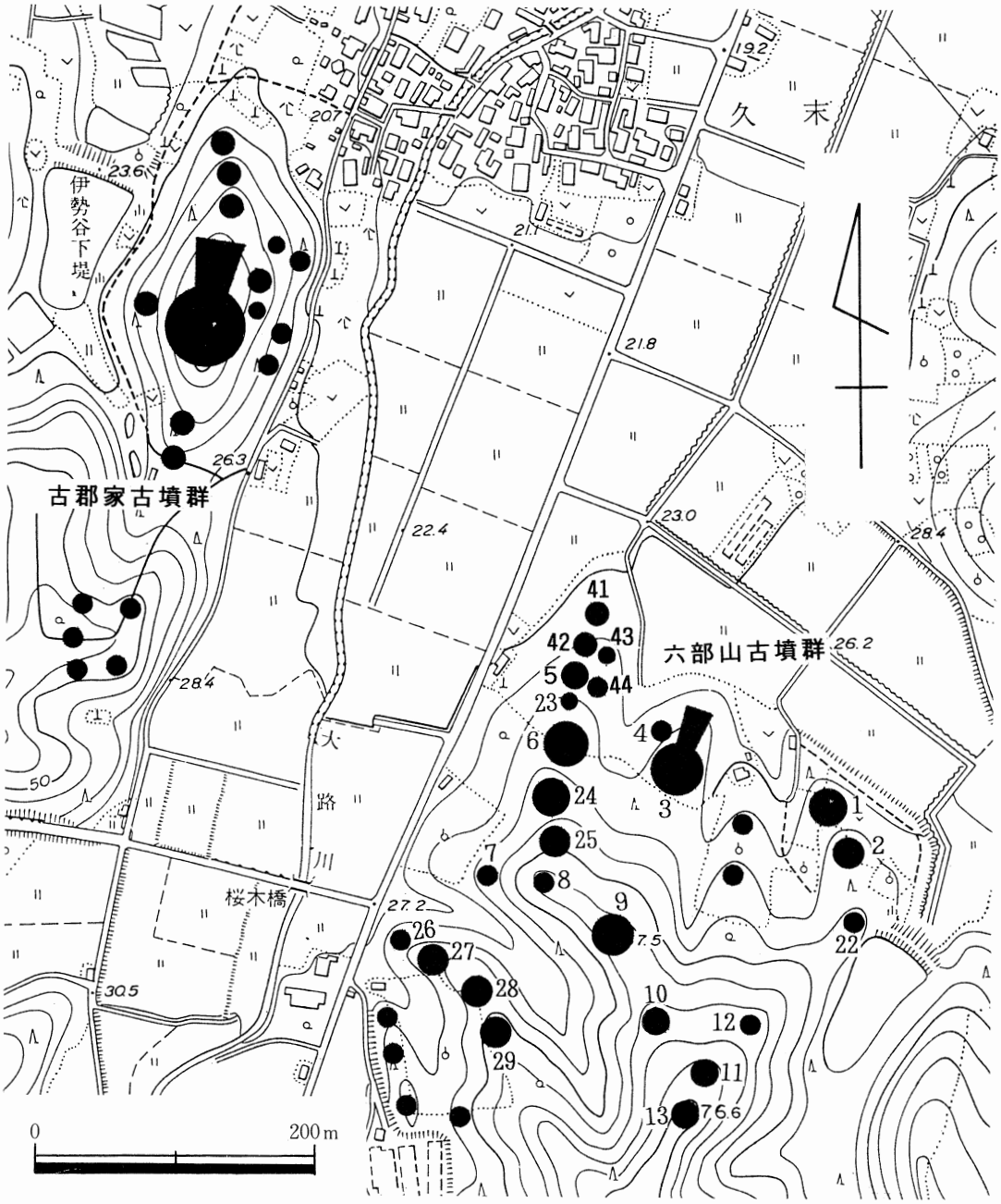
２．六部山古墳群

久末周辺の丘陵地は、梨を中心とする果樹栽培が古くから盛んであり、園地の造成や耕作による古墳の発見や遺物の出土も多い。このため、早くから考古学的な調査・研究の対象となり、市域でも古墳分布や横穴式石室の特色などが比較的把握されてきた地域である。

1924年（大正13）前後には木山竹治氏らの調査がすでに行なわれており、六部山３号墳などは、その調査成果である『鳥取縣史蹟勝地調査報告第二冊』に紹介された。その後1960年代前半には、古郡家１号墳の発掘を契機とする鳥取大学歴史学研究会を中心とする調査があり、古墳の分布状況などについて大要が明らかにされた。しかしながら、本格的な発掘調査などによって概要が明らかとなっている古墳は少ない。これまでに出土遺物の知られている古墳もその大部分が耕作などによって発見されたものが多く、詳細は不明の部分が多い。

六部山古墳群は、今回の調査地から南東に広がる久末地区の丘陵地に所在する古墳を総称し、現在までのところ44基の古墳が確認されている。しかし、今後の分布調査次第では、相当数の古墳が新たに発見確認される可能性もある。群内には、前方後円墳（３号墳）、大型円墳（１，６号墳）が見られるほか、横穴石室をもつ古墳も多く、各古墳の立地、埋葬施設、築造時期など異なっている。将来的には詳細な分布調査によって小群に再構成する必要があろう。

以下主要な古墳について概略を記しておきたい。六部山１号墳は、直径28ｍを測る円墳で、箱式石棺内から馬鐸、杏葉など多くの馬具が出土している。六部山３号墳は、前期古墳と考えられている全長63ｍ、後円部径38ｍ、後円部高4.5ｍの前方後円墳である。中心の埋葬施設は竪穴式石室と推定されているが、詳細は不明である。しかし、墳丘からは石棺状の遺構や複数の埴輪棺が発見さ



第2図　古郡家古墳群・六部山古墳群分布図（部分）

れている。これまでに知られている遺物としては、埴輪、変形獣首鏡、鑿頭の鉄鏃がある。埴輪棺に使用されている埴輪は、丹後地方に多く見られる特殊な壺形埴輪である。六部山6号墳は、直径31mの円墳で箱式棺内から鉄刀などが出土している。土地所有者からの聞き取りによれば、大正年間に果樹園として開墾したとき開棺したとのことである。墳丘には埴輪片の散布が見られ、墳裾部からは類例の乏しい埴製棺が出土している。六部山21号墳は、別称加納林古墳とよばれる直径10m

程度の円墳で、1969年(昭和44)の梨園造成中に珠文鏡が出土し注目された。箱形石棺2基のほか木棺、土器棺があったとされ、銅鏡のほか土師器の器台、壺が現在も残されている。六部山38号墳は、21号墳の3～400m南側に位置する径15mほどの円墳で、1983年(昭和58)に牧草地の造成中に発見された。一部破壊された箱形石棺から鉄刀、刀子、竪櫛が出土している。

主要参考文献

梅原末治「因伯二国に於ける古墳の調査」『鳥取縣史蹟勝地調査報告』第二冊　鳥取県　1924年

古郡家1号墳調査団「美和古墳群」『ひすい』78～100号　佐々木古代文化研究室　1960～1962年

『鳥取県史』　第1巻　鳥取県　1972年

『改訂・鳥取県遺跡地図－第1分冊－』　鳥取県教育委員会　1973年

『久末・古郡家遺跡発掘調査報告書』　鳥取市教育委員会　1974年

「大路川遺跡調査概報」『鳥取市文化財報告書Ⅲ』　鳥取市教育委員会　1978年

『鳥取県装飾古墳分布調査概報』　鳥取県教育委員会　1981年

『鳥取県の古墳』　鳥取県埋蔵文化財センター　1986年

『広岡古墳群発掘調査報告書』　鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団　1986年

『面影山古墳群・吉岡遺跡発掘調査概要報告書』　鳥取市教育委員会　1987年

『広岡古墳群発掘調査概要報告－広岡72･73･74･75号墳の調査－』　鳥取市教育委員会　1989年

久保穣二朗「六部山21号墳出土品」『郷土と博物館』第35巻　第1号　1989年

『鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』　鳥取市教育委員会　1990年

第3図　六部山3号墳（北から）

Ⅲ　発掘調査の概要

1．調査古墳の概要

今回調査を実施した5基の古墳のうち5号墳を除く4基は、事前の分布踏査等によって確認された古墳である。このため発掘調査にあたっては、それぞれ六部山41･42･43･44号墳と呼称した。

調査古墳の立地する丘陵上には、南北方向の稜線に沿って、円墳と考えられる10基余りの古墳が築造されている。ほぼ中央に位置する直径31mの6号墳を中心として、小群を構成するものと考えられる。今回の調査古墳は、この6号墳の北側に位置する5基の古墳を対象として実施した。東どなりの丘陵には六部山3号墳、また、小尾根を挟んだその東側の丘陵には六部山1号墳が位置している。

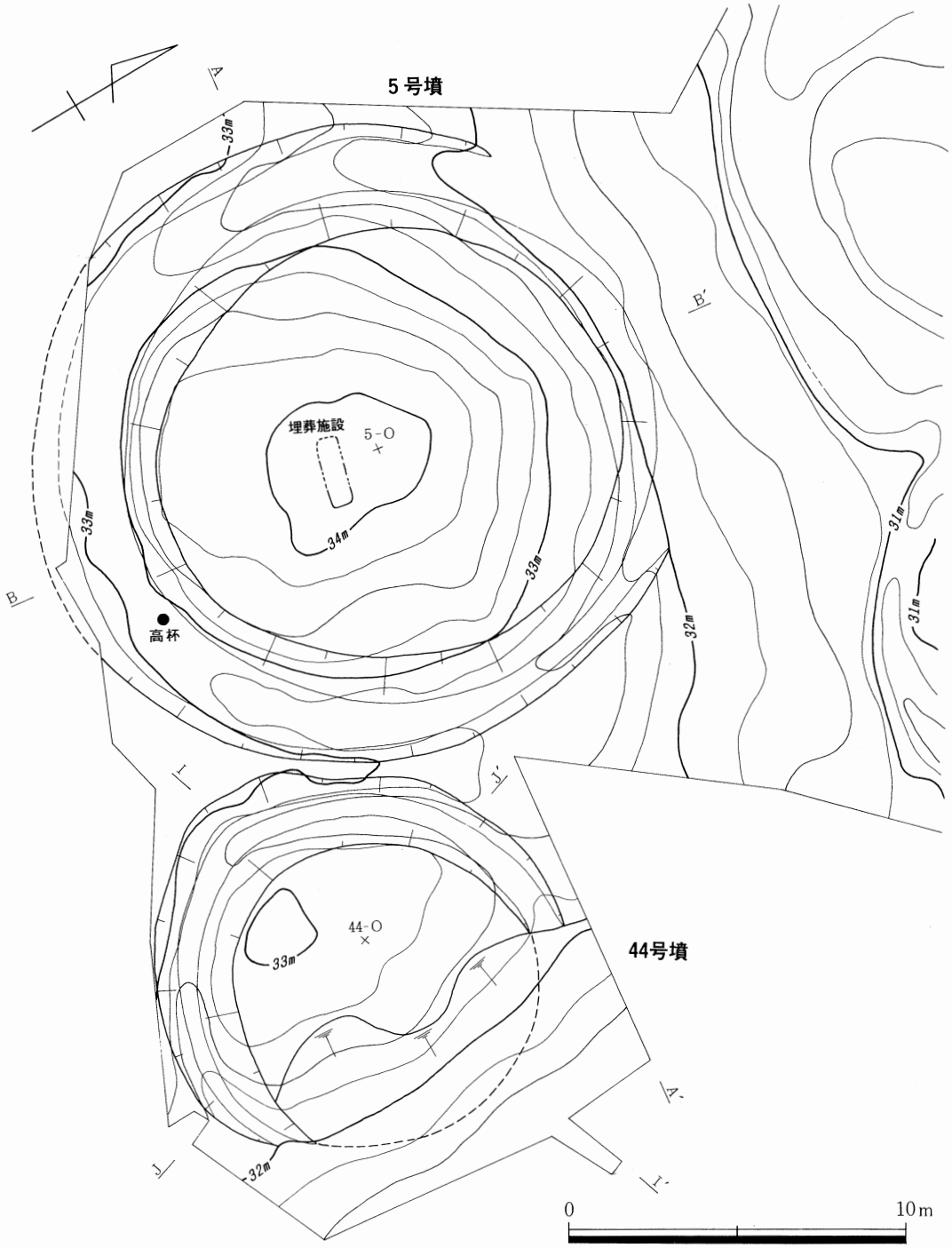
5基の古墳は、久末集落の南東500ｍの県道鳥取郡家線に沿った丘陵先端部に築造されている。この調査古墳の立地する丘陵は、空山山塊から枝分かれしながら北側の平野部に延びる尾根の一つで、平野に接する端部は比較的広い舌状を呈した緩やかな丘陵となっている。調査前は、二十世紀梨の果樹園として利用されていたため、いずれの古墳も開墾時の掘削や長年の耕作による影響を受けている。墳丘の残る古墳は、1973年(昭和48)刊行の『改訂・鳥取県遺跡地図－第1分冊－』に登載されている5号墳の1基だけであった。その他の古墳の墳丘は既に削平されていたが、わずかな丘陵斜面の張出しや段状の地形によって、古墳の可能性を指摘することができた。なお、調査地と谷部水田との比高差は、5号墳で約11ｍ、41号墳で約6ｍを測る。

5基の古墳は、舌状を呈する広い尾根の中央部を利用して築造されている。調査地の最高所に5号墳が位置し、やや下ってその北側に42号墳、41号墳と続く。5号墳、42号墳の東側には、それぞれ対になるかのように小型の44号墳、43号墳が周溝を接して築造されている。5基の古墳の墳丘は、5号墳の盛土状況の観察や古墳の立地する地形などから、主として盛土によって築かれていたものと考えられ、円形ないし弧状にめぐる周溝によって区画されている。墳丘規模は5号墳、41号墳、42号墳の3基が直径11～12mを測り、43号墳、44号墳の2基はやや小さく直径7ｍである。埋葬施設は、5号墳、42号墳の2基でそれぞれ1基検出した。5号墳は、墳頂部から検出した木棺直葬の埋葬施設で、高杯の杯部を使用した土師器転用枕が認められた。42号墳の埋葬施設は、周溝に掘り込まれた副次的な埋葬施設で、一部に石蓋状の板石が検出されている。

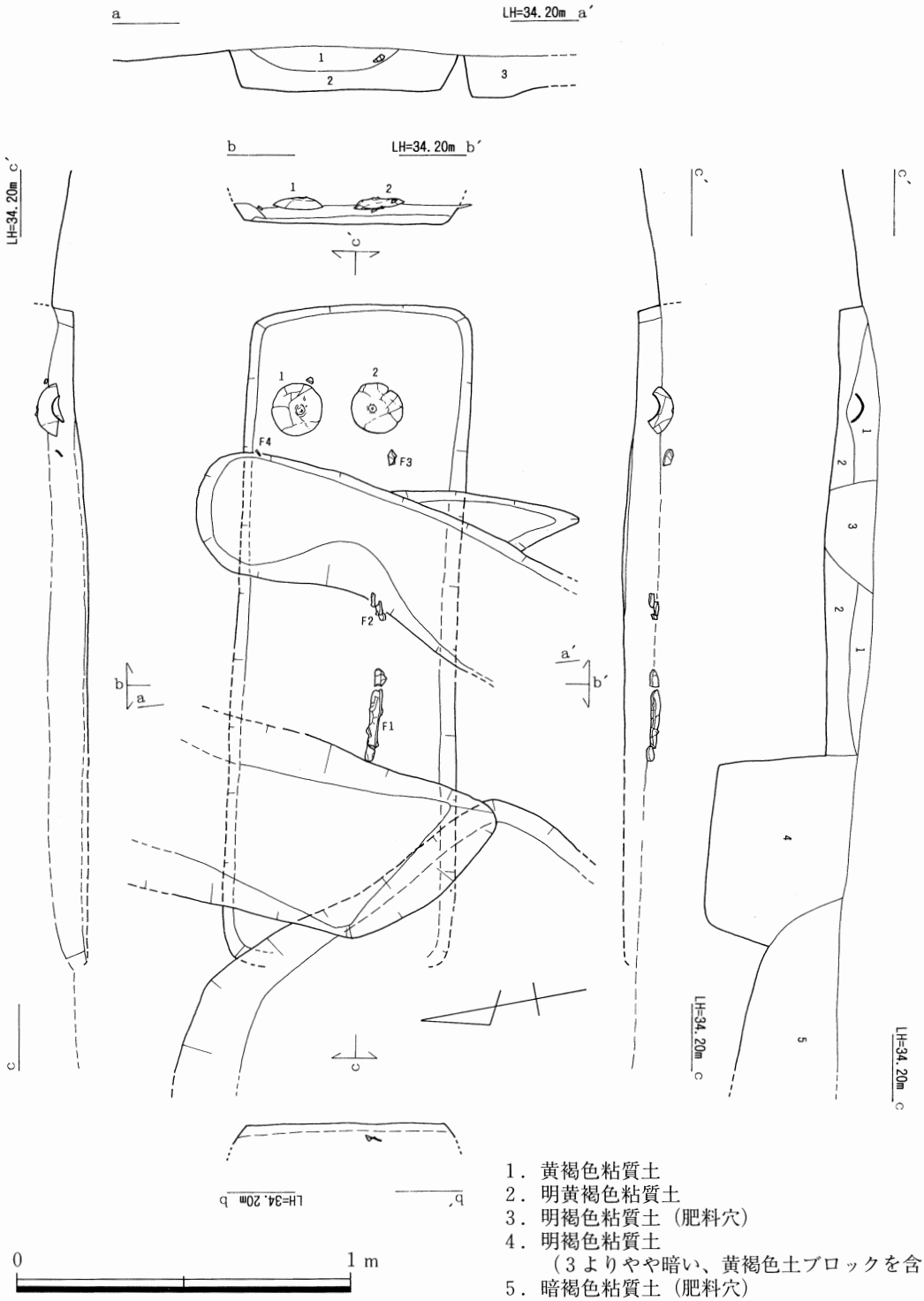
調査古墳に伴う出土遺物は、古墳の遺存状態を反映してか種類、点数とも少ない。土師器、須恵器、鉄刀などが、埋葬施設、周溝などから出土している。

2．六部山5号墳

調査地の南端に位置する円墳である。墳頂部の標高34.2ｍを測り、今回の調査古墳の中では最高所に立地する。東側には44号墳が隣接しており、北側には42、43号墳が位置する。調査前の古墳の



第4図　六部山5・44号墳 墳丘実測図



1．黄褐色粘質土
2．明黄褐色粘質土
3．明褐色粘質土（肥料穴）
4．明褐色粘質土
（3よりやや暗い、黄褐色土ブロックを含む;肥料穴）
5．暗褐色粘質土（肥料穴）

第5図　六部山5号墳埋葬施設実測図

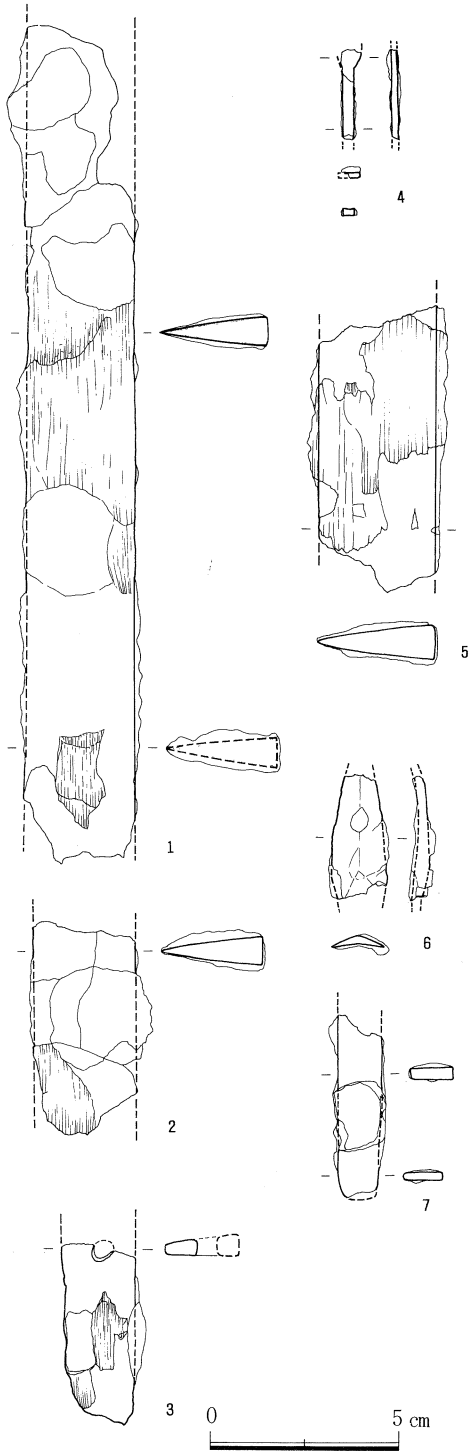
状況は、明瞭な円丘状の高まりがあり、古墳として認識することは比較的容易であった。しかし、墳丘の外表は、長年の耕作による肥料穴などによる攪乱で損傷が激しい。

墳丘　5号墳の墳丘は、丘陵の比較的平坦な部分を利用して、主として溝(周溝)の掘削と盛土とによって築造されたものである。弧状を呈する周溝は、丘陵高位の南側及び東西両側に認められ、ほぼ真円を描く。溝の消える北側には、墳裾を示すわずかな傾斜の変換が認められる。墳丘断面の観察では、この部分で旧表土とした黒灰色粘質土及びその下層が掘削されており、築造時には墳裾を画する地山の加工が行なわれたことを示唆している。周溝はしっかり掘り込んであり、上部が攪乱のためはっきりしないが幅は約3m、深さは南側で約1m程度はあったものと考えられる。断面はゆるやかな舟底状を呈する。周溝底の比高差は、南側の標高約33mを頂点として東西それぞれに約1mあり、標高約33m付近で斜面に消える。

墳丘の盛土は、周溝の掘削や地山の削平によって生じた土砂を利用したものと思われるが、残存する盛土の最大厚は0.9mである。盛土は、旧地表土の上から10～20cm単位で平均的に積まれており、突き固められたような痕跡は見られなかった。

墳丘規模は、南北墳裾間で直径16.1m、東西周溝底間で16m、南側周溝底からの残存高約1.27m、北側墳裾からは2.64mを測る。本来の墳丘高は、後述する埋葬施設の位置から考えればもう1mほど高かったものと思われる。

なお、葺石、埴輪列などの墳丘外表施設は検出されなかった。



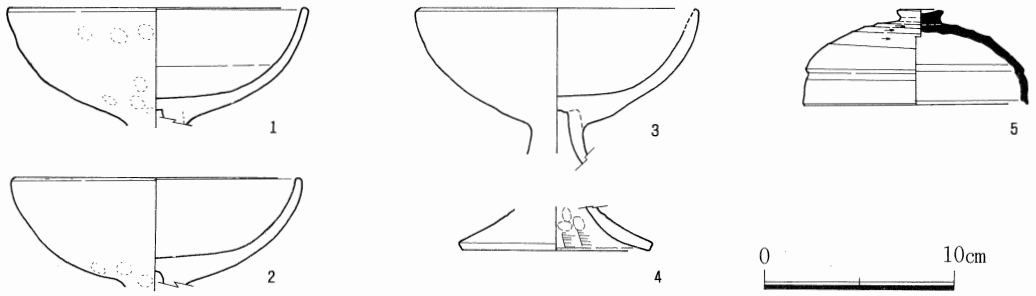
第6図　六部山5号墳出土遺物実測図 (1)

埋葬施設　５号墳からは、墳丘中央で埋葬施設を１基検出した。この埋葬施設は、盛土に掘り込まれた墓壙で、推定長200㎝強、幅 67㎝、検出面からの深さは14㎝である。表土直下にあり、このため東側の一部と西側の1/3を果樹園の肥料穴によって攪乱され、残存状況は悪い。残存部から推定すれば、平面形はほぼ東西（Ｎ－80°－Ｗ）に主軸をとる隅丸長方形を呈するものと考えられる。墓壙底は平らで、横断面は逆台形となる。壙底からは、５㎝強の厚さで敷かれた明黄褐色粘質土が検出されている。この土層の墓壙中央部での横断面は浅いＵ字形を呈している。

埋葬施設からは、脚部を打ち欠かれた土師器高杯２点、鉄刀１点、器種不明の鉄器小片が出土した。いずれも墓壙底面からではなく、ほぼ均一の厚さを保って墓壙底面から検出された明黄褐色粘質土上から出土している。高杯は、東小口部から約30㎝の位置に10㎝ほど離して伏せて並べられていた。遺体の枕としていたもので、いわゆる土師器転用枕と呼ばれるものである。鉄刀は、肥料穴等による攪乱によって欠損部も多いが、復元長は１ｍ程度の直刀である。墓壙南側壁から約20㎝の位置に平行に置かれていた。切っ先を西側に、刃部を北側にして出土した。鉄小片は、東小口から約35㎝の北側の側壁際から出土している。このほか本古墳に伴うと考えられる遺物として鉄刀、鉇（やりがんな）があり、攪乱穴から見出されている。この鉄刀は、埋葬施設で検出した鉄刀より刃の幅、厚さともに大きく別の個体と考えられる。

本埋葬施設は、土層断面などで明瞭な木棺の痕跡を観察しえなかったが、墓壙の規模、形態、埋土及び遺物の出土状況から木棺を直葬したものと考えたい。また、遺物の出土位置からすれば、全体として墓壙の北側に寄って木棺は埋置されていたと考えられよう。

出土遺物　第７図１、２の土師器高杯は、土器枕として転用されていたため、いずれも脚部を欠くが杯部は完存している。ともに内湾しながら立ち上がる椀状の杯部で、内外面を赤彩する。口縁端部横ナデ、底部、体部内外面ともナデ調整、外面には指頭圧痕が残る。胎土はごく細かい砂を含むが、精錬されたきめの細かいものである。それぞれ口径15.4㎝、14.8㎝を測る。３、４は、南東側の周溝底から出土した土師器高杯である。やや器壁が厚くなるほかは、内外面の赤彩を含めて１、２とほぼ同様である。３の口径14.4㎝、４の脚裾径は9.9㎝である。５は須恵器の蓋で、南東側の



第７図　六部山５号墳出土遺物実測図 (2)

周溝底から出土している。丸みのある天井部に扁平なつまみが貼付されており、有蓋高杯の蓋であろう。天井部と口縁部を分ける稜は鈍く、口縁端部は内傾する。天井部にはカキ目が見られる。口径11.7㎝、器高5.0㎝を測る。第６図１、２、３は埋葬施設から出土した鉄刀である。茎から刀身の約1/2が遺存し、断面楔形の刃部は幅2.7～2.8㎝、背の厚さ0.75㎝を測る。茎部は関側を欠くが、端部から４㎝ほどの位置に目釘穴が観察できる。幅2.0㎝、厚さは背側で0.6㎝刃側で0.3㎝である。刀身、茎の一部には木質部が銹によって遺存している。４は北側の側壁際から出土した遺存長2.4㎝を測る鉄器で、小片であるため器種を特定することができない。５は、検出した埋葬施設と切り合う肥料穴から出土した鉄刀の刃部である。断面楔形を呈し、幅3.1㎝、厚さ0.9㎝を測る。６、７は、刃部と柄部の一部が残る鉋である。墳丘の南東部で出土した。両側に刃を付けた木の葉形の刃部で、上面に三叉の鎬を持ち、裏面はゆるやかに内湾する。刃部の最大幅は1.9㎝を測る。柄は端部に向かって幅を減じ、断面長方形を呈する。幅1.15㎝、厚さ0.3㎝、遺存長4.9㎝を測る。

３．六部山41号墳

調査地北端に位置し、調査古墳の中では一番低い標高29ｍ前後の丘陵端部に立地する。調査前の状況は、丘陵先端に向かってわずかな高まりと張出しが認められた。41号墳の墳丘は、丘陵先端の平坦な部分を利用して５号墳と同様に溝(周溝)の掘削と盛土とによって築造されたものである。

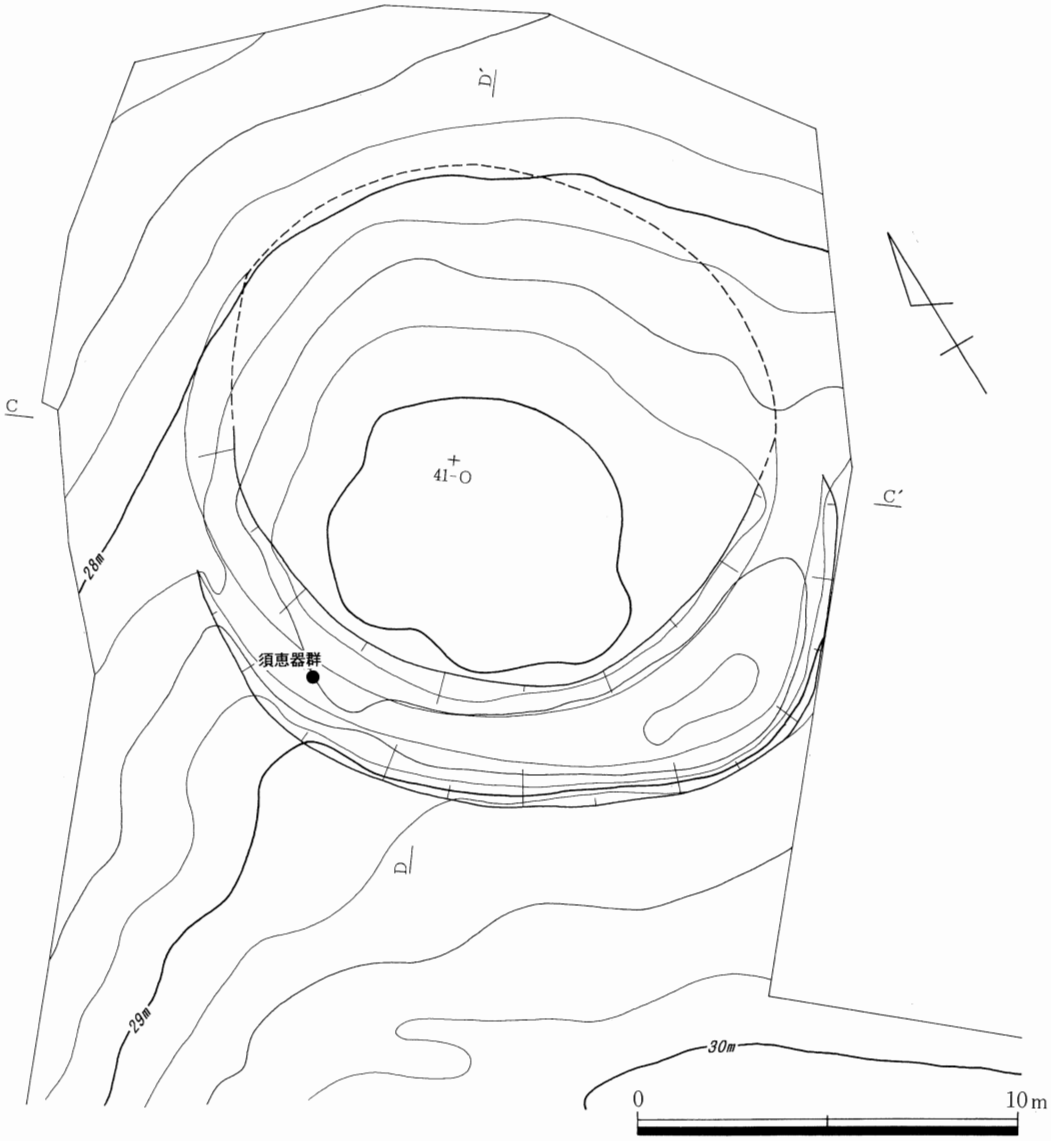
墳丘　41号墳の墳丘は、５号墳と同様に長年の耕作や肥料穴などの掘削で損傷が激しい。しかし、周溝内縁の形状から復元される墳丘は、ほぼ真円に近い平面形を呈するものと考えられる。墳丘の盛土は、すでにその多くが流失、削平されているが、墳丘断面図(第19図)に示した８、９、11の土層がわずかに遺存する盛土の一部と考えられる。

周溝は、丘陵高位の南側を半周するもので、墳丘の北側からは検出できなかった。検出した周溝は比較的良好に遺存しており、東側外縁でやや角度を持って屈曲しているが、内縁は弧状を呈し横断面形は湾曲し舟底状となる。溝底の頂部は墳丘南東側にあり、南側から西側に延びる溝底はおおむね平坦である。遺存状況の良い南側で幅約３ｍ、深さは約0.6ｍの規模を測る。墳丘規模は、東西墳裾間で直径16.0ｍ、南側周溝底からの残存高約0.78ｍを測る。なお、墳丘北側からは、周溝及び周溝にかわって墳丘端を示す傾斜の変換なども認められなかったが、後世の削平などによって流失したものと考えられる。

41号墳に伴う遺物には、須恵器（瓶(はそう)、蓋、蓋杯(ふたつき)）があり、いずれも南東側周溝底付近から比較的集中して出土している。このほか周溝南側の中層から横瓶が出土しているが、後世のもので41号墳に伴う遺物とはみなしがたい。

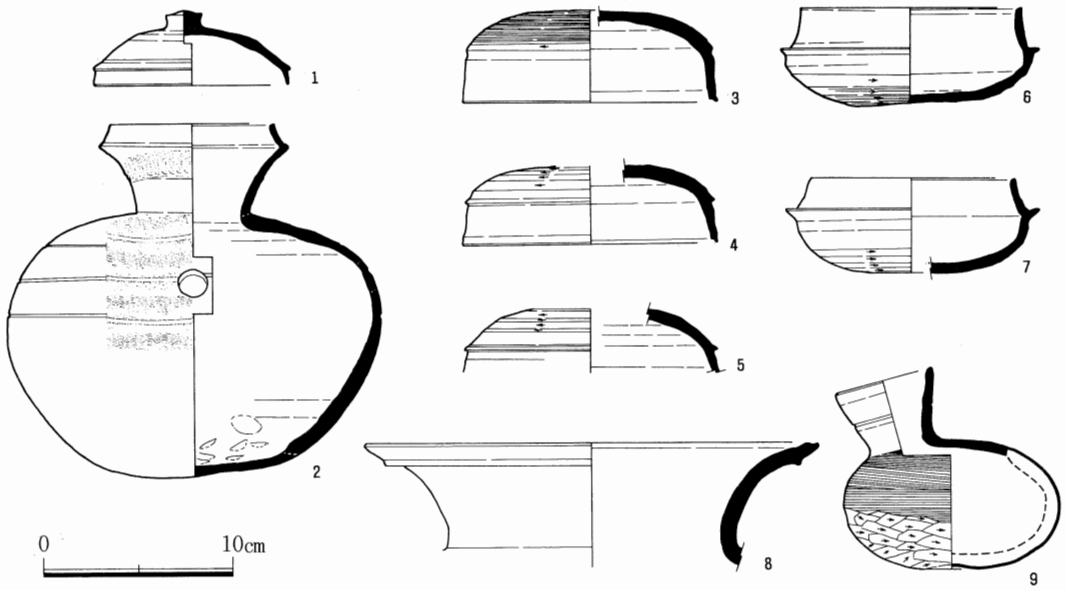
埋葬施設　41号墳では墳丘のかなりの部分が削平されていることもあり、埋葬施設は検出されなかった。

出土遺物　第９図２は、南東部周溝底から出土した内傾する複合口縁を持つ大型の瓶である。頸部



第８図　六部山41号墳墳丘実測図

上半に１段、肩部から胴部上半にかけて３条の沈線をはさみ４段の波状文が廻る。胴部上半には、施文の後外面から穿たれた径1.6㎝の円孔が認められる。内外面とも横ナデを主とし底部はナデ調整するが、底部内面には工具の圧痕が残る。底部の一部は茶褐色だが、色調は主に灰色～黒灰色を呈し、焼成は良好である。なお、破断面の色調は淡赤紫色である。この瓶の法量は口径8.6㎝、器高18.6㎝、胴径19.5㎝である。１は、天井部につまみが貼付された須恵器の蓋で、短い口縁部はやや外開きとなる。色調は灰色を呈し、破断面の色調は２と同様である。口径10.1㎝、器高3.9㎝である。３、４、５は蓋杯の蓋で、比較的平坦な天井部を持ち、口縁部はやや外反し端部には内傾する段が見られる。口縁部の調整は横ナデであるが、天井部はヘラ削りするもの（４、５）とカキ目調



第９図　六部山41号墳出土遺物実測図

整するもの(３)とがある。３の復元口径13.3㎝、復元高4.9㎝である。６、７は蓋杯の杯身で、底部はやや丸みをおび口縁部はやや内傾する。口縁端部は、蓋と異なり丸みをおびる。調整技法は、前述の蓋とほぼ同様である。６は復元口径11.6㎝、復元高5.2㎝である。８は、墳丘北西側の周溝の途切れる付近から採取した須恵器甕である。頸部から大きく外反する口縁部で、端部付近の外面に１条の突帯が廻っている。焼成は良好で、破断面の色調は淡赤紫色である。復元口径23.6㎝を測る。９は、周溝の中層から出土した完形の横瓶であるが、先述したように41号墳に直接関わる遺物ではないであろう。器高10.7㎝、口径5.2㎝、胴径11.4㎝と小型である。

４．六部山42号墳

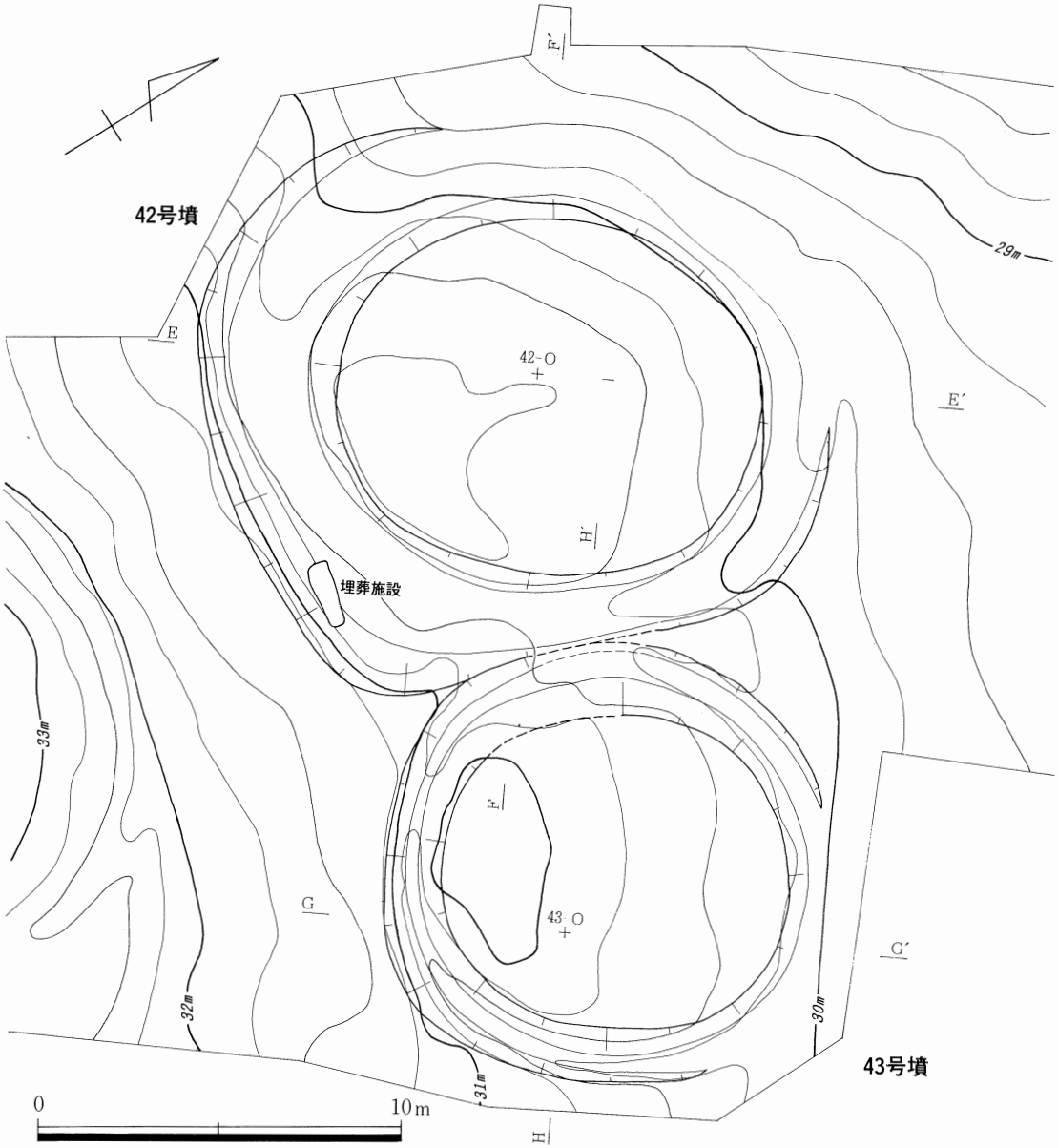
調査地のほぼ中央、５号墳と41号墳の中間に位置し、43号墳と周溝を接して築造された古墳である。調査前の状況は、丘陵先端の北側に向かってわずかな張出しが見られた。42号墳の墳丘も丘陵上の平坦な部分を利用して、溝(周溝)の掘削と盛土とによって築造された円墳である。

墳丘　42号墳の墳丘も、他の調査古墳と同様に長年の耕作や肥料穴などの掘削で損傷が激しい。墳丘の盛土と考えられる土層は、墳丘断面図(第19図)に示した２、３、４などの土層で最大厚は0.3ｍである。いずれにしても、盛土の多くは流失、削平されているものと考えられる。周溝の見られない墳丘の北側には、地山を掘削加工した傾斜の変換が認められる。この地山加工を42号墳の墳裾と見れば、北東～南西に主軸をとるやや楕円形を呈する墳丘となる。北東～南西の方向をとる長径は墳裾間で12.5ｍ、短径は11.0ｍとなる。南側周溝底からの墳丘遺存高は0.6ｍを測る。

周溝は、丘陵高位を廻るもので、低位の墳丘北側は丘陵斜面に消えてしまい検出できなかった。

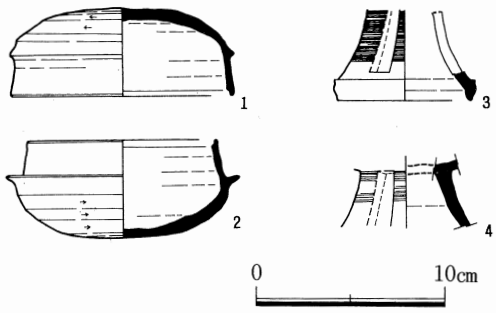
検出した周溝は比較的良好に遺存しており、41号墳と同じように東側外縁でやや角度を持って屈曲しているが内縁は弧状を呈する。溝底は平坦で広く、横断面の形は逆台形状となる。周溝底の頂部は43号墳と接する墳丘東側にあり、西側のそれとの比高差は１ｍ弱を測る。周溝の規模は、墳丘南東部で幅約3.5m、深さは約0.6ｍを測る。周溝からは須恵器片が出土している。

埋葬施設　墳丘内からは封土の大部分が流失、削平されているため埋葬施設を検出することはできなかったが、周溝内から土壙墓を１基検出した。この埋葬施設は、墳丘南側の周溝底と周溝外壁の



第10図　六部山42・43号墳墳丘実測図

接する位置にあり、検出面の平面形は隅丸長方形である。規模は、長さ1.76m、西小口側にある最大幅は0.6m、深さは0.45m前後を測り、主軸をN－14°－Wにとる。墓壙の各壁とも比較的に急角度で掘り込まれており、特に南側では顕著である。墓壙の底面はおおむね平坦で、西側が幅広の隅丸長方形となる。底面の長さは1.6m、幅は西小口側で0.42m、東小口側で0.3mを測る。墓壙東側上面には、安山岩系の板石が石蓋状に架構されている。この板石は中央部で土圧などによって折れているが、長さ0.9m幅0.2～0.3mを測る一枚石である。この他墓壙中央部及び西側でも底面から0.2mほど浮いた状態で、長さ0.2～0.3m程度の板石が各1枚検出されている。この埋葬施設の副葬遺物として、西小口寄りの底面中央から蓋杯1組が出土した。この蓋杯は、蓋が西小口側に半分ほどずれた状態で検出されている。なお、本埋葬施設の墓壙断面の観察からは、木棺の使用を想定するに足る積極的な根拠を得ることができなかった。



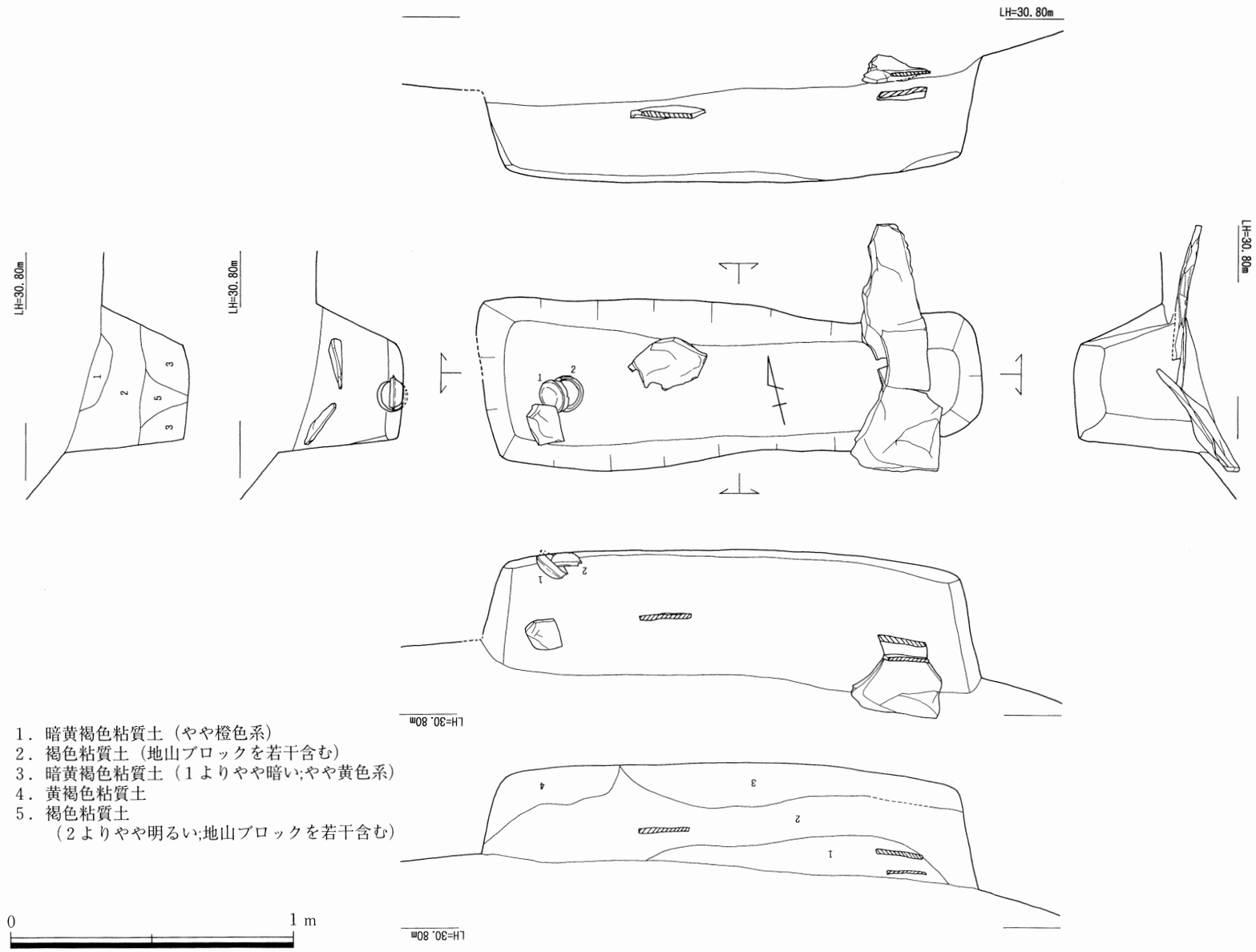
第11図　六部山42号墳出土遺物実測図

出土遺物　第11図1、2は、埋葬施設から出土した完形の蓋杯である。蓋(1)は、比較的丸みをおびた天井部を持ち口縁部はやや外反する。口縁端部には内傾する段が見られ、天井部と口縁部を分ける稜も明瞭である。杯身(2)は、丸みのある底部とやや内傾する口縁部を持つ。口縁端部は1と同様に内傾する段が見られ、受部はやや上方に突出する。天井部及び底部はヘラ削りし、他は横ナデである。1の口径11.6cm、器高4.7cm、2の口径9.8cm、受部径12.2cm、器高5.2cm。1、2とも淡青灰色を呈し、1mm前後の細砂を含む胎土で焼成は良好である。3、4は須恵器高杯の脚部で、3は北東部、4は南西部の周溝埋土中から出土した。いずれも短脚で、三方に方形の透し孔を持ち、上部外面にカキ目調整を施す。3、4とも焼成は良好で灰色を呈し、胎土には0.5mm前後の細い砂を含む。

5．六部山43号墳

調査地の中央に位置し、42号墳の東側に隣接して築造された円墳である。調査前は古墳の存在を示す墳丘状の高まりは認められず、なだらかな傾斜を持った丘陵斜面であった。しかし、細く観察すると北東方向に張り出す微地形が認められた。このため、確認のトレンチを掘削したところ、周溝が検出されその存在が明らかとなった。

墳丘　43号墳の墳丘も、他の調査古墳と同様に周溝の掘削と盛土によって築造されていたものと考えられる。墳丘の盛土と考えられる土層は、墳丘東側にごく一部遺存しているが多くは流失、削平されてしまっている。周溝は墳丘北東側の一部を除きしっかり掘り込んであり、ほぼ真円を描く。



第12図　六部山42号墳周溝内埋葬施設実測図

墳丘南側で幅1.7ｍ、深さは約0.6ｍあり、断面形はＵ字形を呈する。周溝底は、南西側の標高30.75ｍ付近を頂点としてそれぞれ下っていき標高30ｍ付近で斜面に消えていく。墳丘の北東側は周溝が見られないが、表土除去後の観察では標高30.25ｍ付近にわずかな地山の傾斜変換点があり、周溝を延長したラインとも合致する。このことから、明瞭な地山加工の痕跡が認められないが、この傾斜が変換する部分を墳裾と考えてもよいであろう。これらの調査で判明した43号墳の墳丘規模は、東西、南北の墳裾間とも直径10.7ｍを測り、遺存高は南側周溝底から0.52㎝、東側周溝底から0.76㎝を測る。

埋葬施設　墳丘の大部分が流失、削平されているため、埋葬施設を検出することはできなかった。

出土遺物　他の古墳と同様に表土、周溝埋土中、肥料穴から古墳築造前後の弥生土器、土師器、須恵器などが出土している。しかし、確実に本墳に伴う遺物とはみなしがたい。

６．六部山44号墳

調査地の最も北側に位置し、西側には５号墳が隣接して築造されている。44号墳は今回の調査古墳群の立地する平坦な丘陵尾根筋の東端に位置し、古墳の東側からは谷部へ向かって傾斜が強くなっている。44号墳も43号墳と同様に墳丘状の高まりや明瞭な張出しは認められなかった。しかし、地形を詳細に観察すると東向きにわずかな張り出しが認められ、確認のためのトレンチを設定した。このトレンチによって周溝が確認され、墳丘の大部分を失った古墳の存在が明らかとなった。

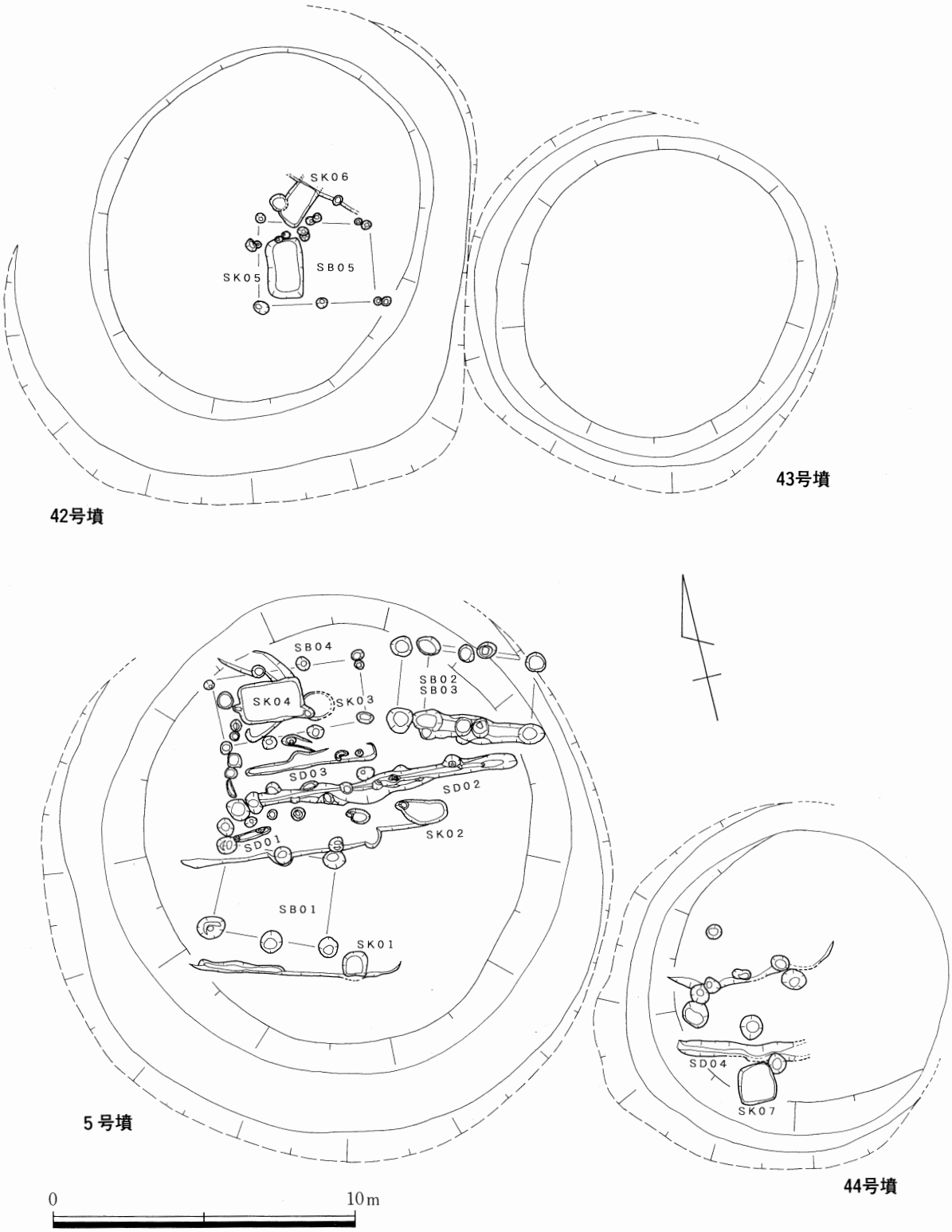
墳丘　44号墳の墳丘も、他の調査古墳と同様に耕作による攪乱が激しい。墳丘の築造は、周溝の掘削と盛土によったものと考えられ、盛土の一部が遺存している。墳丘断面図(第18図)に示した12、13、23、24の土層がそれであるが、多く残っている部分でも0.3ｍほどである。周溝は墳丘東側を除きしっかり掘り込んであり、ほぼ真円を描く。墳丘南西側で幅3.0ｍ、深さは約0.6ｍあり、断面形は浅いＵ字形を呈する。周溝底は、南西側の標高33ｍ付近を頂点として下っていき標高32ｍ付近で斜面に消えていく。墳丘の東側には周溝が見られないが、表土除去後の観察では標高31.75ｍ付近にわずかではあるが盛土と考えられる土層が遺存している。この盛土の外縁は、周溝部の墳裾を延長したラインと合致している。この盛土の外縁を墳裾と考えてもよいであろう。このことは、44号墳の丘陵谷部側の墳丘裾部の区画を地山の切削加工によらず、盛土によって行なわれたことを示唆している。調査の結果、44号墳は東西、南北の墳裾間とも直径10.2ｍ、南側周溝底からの遺存高0.8mの規模を測り、ほぼ真円の平面形を描く墳丘を持っていたものと想定できる。

埋葬施設　墳丘の大部分が流失、削平されているため、埋葬施設を検出することはできなかった。

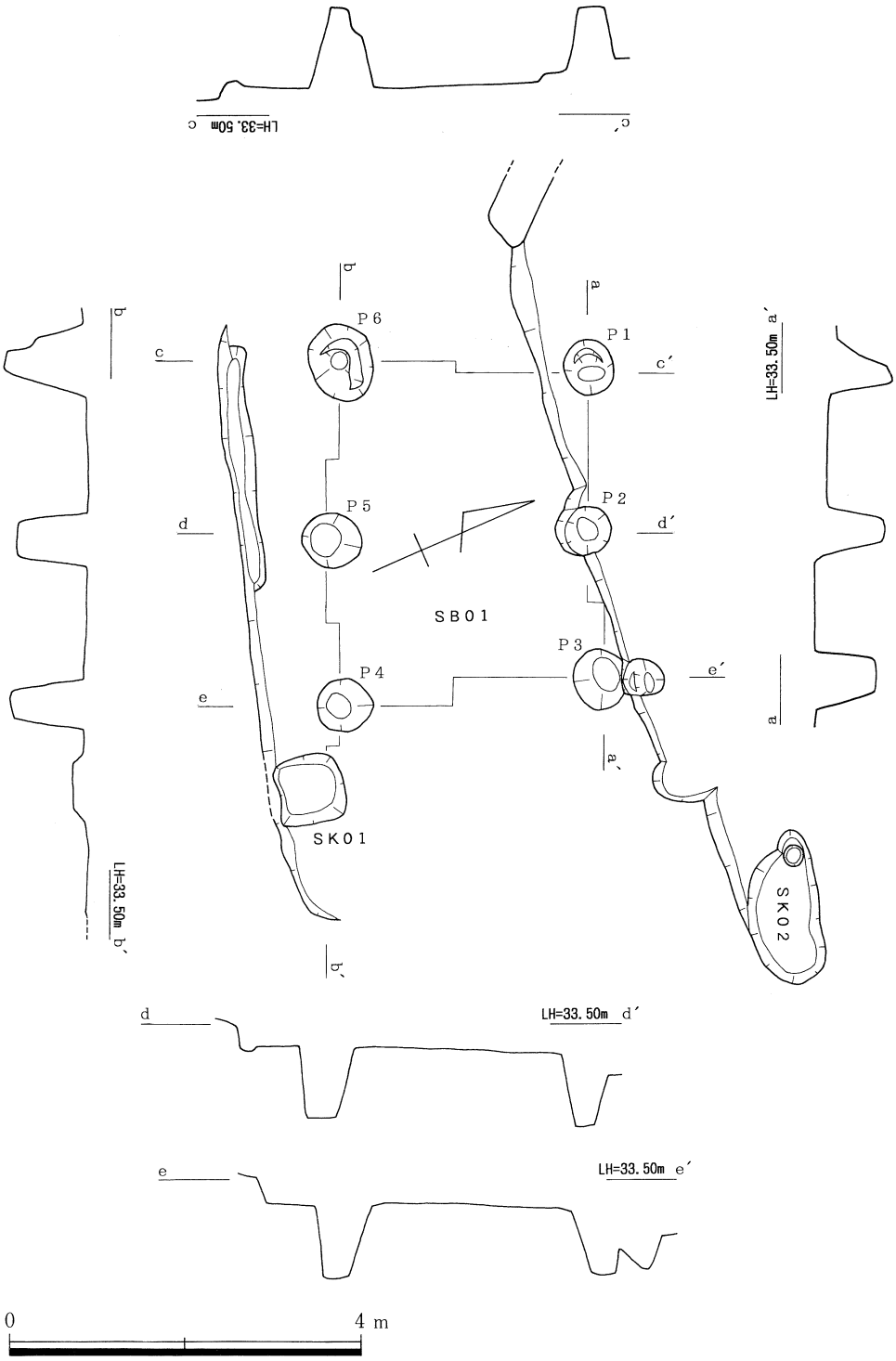
出土遺物　他の古墳と同様に表土、周溝埋土中、肥料穴などから古墳築造前後の土器類が出土しているが、44号墳に伴う遺物とは考えられない。

７．古墳築造以前の遺構

本調査地に弥生土器、古式土師器など古墳築造以前の遺物が散布していることは、調査前の踏査



第13図　古墳築造以前遺構配置図



第14図　SB01実測図

の段階から知られていた。また、調査に入ってからも、表土及び古墳周溝埋土中からかなりの量の土器片が採集された。このため、古墳の調査終了後改めて調査地の精査を実施するとともに、５号墳の墳丘盛土を除去して古墳築造以前の遺構を検出した。なお、わずかではあるが奈良時代以降の須恵器も採集されているが、当該期の遺構は検出できなかった。

今回の調査で検出した遺構には、掘立柱建物とこれに伴う溝状遺構、段状遺構、土坑などがある。この他、多数の柱穴を検出したが、相互の関連性を掴むまでにはいたらなかった。これらの遺構は、丘陵上半部に位置する５、42、44号墳の墳丘下から検出したもので、下半部からは検出されなかった。５号墳の墳丘下から検出した各遺構は、旧地表上の盛土によって保護されていたため比較的保存状態が良い。しかし、42、44号墳丘から見出された遺構は、表土下にあるため耕作による攪乱を受け、古墳の墳丘とともにいくぶん削平されているようである。

掘立柱建物　５、42、44号墳の墳丘下及び墳丘から多数の柱穴を検出したが、建物跡として確認したものは５号墳墳丘下から４棟、４２号墳墳丘から１棟の合計５棟である。

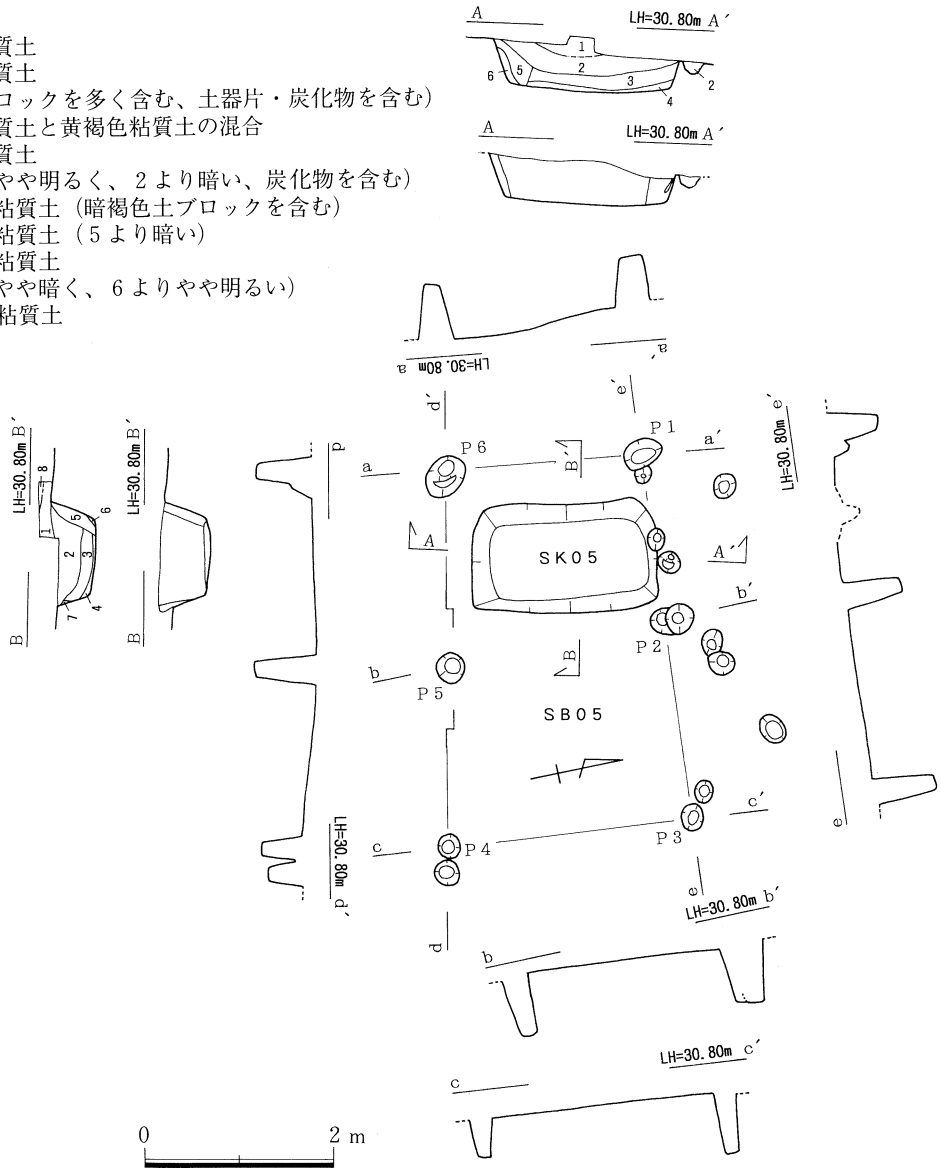
ＳＢ01は、５号墳墳丘の南西部に位置する桁行１間、梁行２間の建物である。主軸はＮ－69°－Ｗを示す。柱間距離は、Ｐ１～Ｐ２が1.8m、Ｐ２～Ｐ３が1.7m、Ｐ３～Ｐ４が3.0m、Ｐ４～Ｐ５が1.8m、Ｐ５～Ｐ６が2.0m、Ｐ６～Ｐ１が2.9mを測る。いずれの柱穴もほぼ平面円形を呈し、径60cm前後、深さ約80cmである。

ＳＢ02、03は、いずれも５号墳墳丘の北東部から重複して検出された桁行１間、梁行２間の建物で、いずれも主軸をＮ－70°－Ｗにとっている。ＳＢ02はＰ1、Ｐ3、Ｐ5、Ｐ6、Ｐ8、Ｐ10、ＳＢ03はＰ2、Ｐ4、Ｐ5、Ｐ6、Ｐ7、Ｐ9をそれぞれの柱穴として建て替えを想定している。ＳＢ02の柱間距離は、Ｐ1～Ｐ3が2.1m、Ｐ3～Ｐ5が2.4m、Ｐ5～Ｐ6が2.4m、Ｐ6～Ｐ8が2.3m、Ｐ8～Ｐ10が2.1m、Ｐ10～Ｐ1が2.4mを測る。ＳＢ03の柱間距離は、Ｐ2～Ｐ4が2.0m、Ｐ4～Ｐ5が1.8m、Ｐ6～Ｐ7が1.7m、Ｐ7～Ｐ9が1.8m、Ｐ9～Ｐ2が2.4mを測る。いずれの柱穴もＳＢ01と同様の規模であるが、Ｐ4、Ｐ7には柱を受ける板石が柱穴の底部から検出されている。また、Ｐ6～Ｐ9間はいわゆる布掘りとなっている。

ＳＢ04は、５号墳墳丘の北西部から検出された桁行１間、梁行3間の建物で、主軸をほぼ東西（Ｎ－88°－Ｗ）にとっている。この建物の南約0.5mにはほぼ平行してＳＤ03がある。柱間距離は、Ｐ１～Ｐ２が1.7m、Ｐ２～Ｐ３が1.5m、Ｐ３～Ｐ４が1.8m、Ｐ４～Ｐ５が2.0m、Ｐ５～Ｐ６が1.7m、Ｐ６～Ｐ7が1.6m、Ｐ7～Ｐ8が1.5m、Ｐ8～Ｐ1が2.1mを測る。いずれの柱穴もほぼ平面円形を呈し径40cm前後である。

ＳＢ05は、42号墳墳丘の中央東寄りで検出された桁行１間、梁行２間の建物である。主軸はＮ－79°－Ｗを示す。柱間距離は、Ｐ１～Ｐ２が1.8m、Ｐ２～Ｐ３が2.1m、Ｐ３～Ｐ４が2.6m、Ｐ４～Ｐ５が1.9m、Ｐ５～Ｐ６が2.1m、Ｐ６～Ｐ１が2.1mを測る。いずれの柱穴もほぼ平面円形を呈し、径30cm前後、深さ約60cmである。ＳＢ05のプランの西側にはＳＢ04と同様に長方形のプラン

第15図　六部山５号墳墳丘下遺構実測図



第16図　SB05．SK05実測図

をもつ土坑（ＳＫ05）が重複して検出されている。

土坑　5、42、44号墳の墳丘下から7基の土坑を検出している。ＳＫ04、ＳＫ04は掘立柱建物ですでに触れたように、それぞれの建物遺構にかかわる貯蔵施設的な機能を有するものと考えられる。5号墳の墳丘下から検出されたＳＫ02は、長径1.56ｍ、短径0.8ｍの平面楕円形を呈する土坑である。緩いＵ字状の断面形を呈し深さ0.2ｍを測る。この土坑からは、二次的な焼成を受けた比較的多量の土器が礫と共に出土している。壺、甕、高杯、器台、蓋等の器種が見られるが、高杯、器台の占める割合が大きい。土器はいずれも弥生時代後期後半の様相を示す。

Ⅳ 小　　結

今回の調査地は古墳築造後の長い年月に渡る土砂の流失や果樹園の肥料穴などによって改変が著しかったものの、5基の古墳を調査することができた。また、これらの古墳の墳丘下から検出された古墳築造以前の遺構についてもあわせて調査を実施することができた。種々の制約もあり十分な検討ができていないが、調査の所見をごく簡単にまとめておきたい。

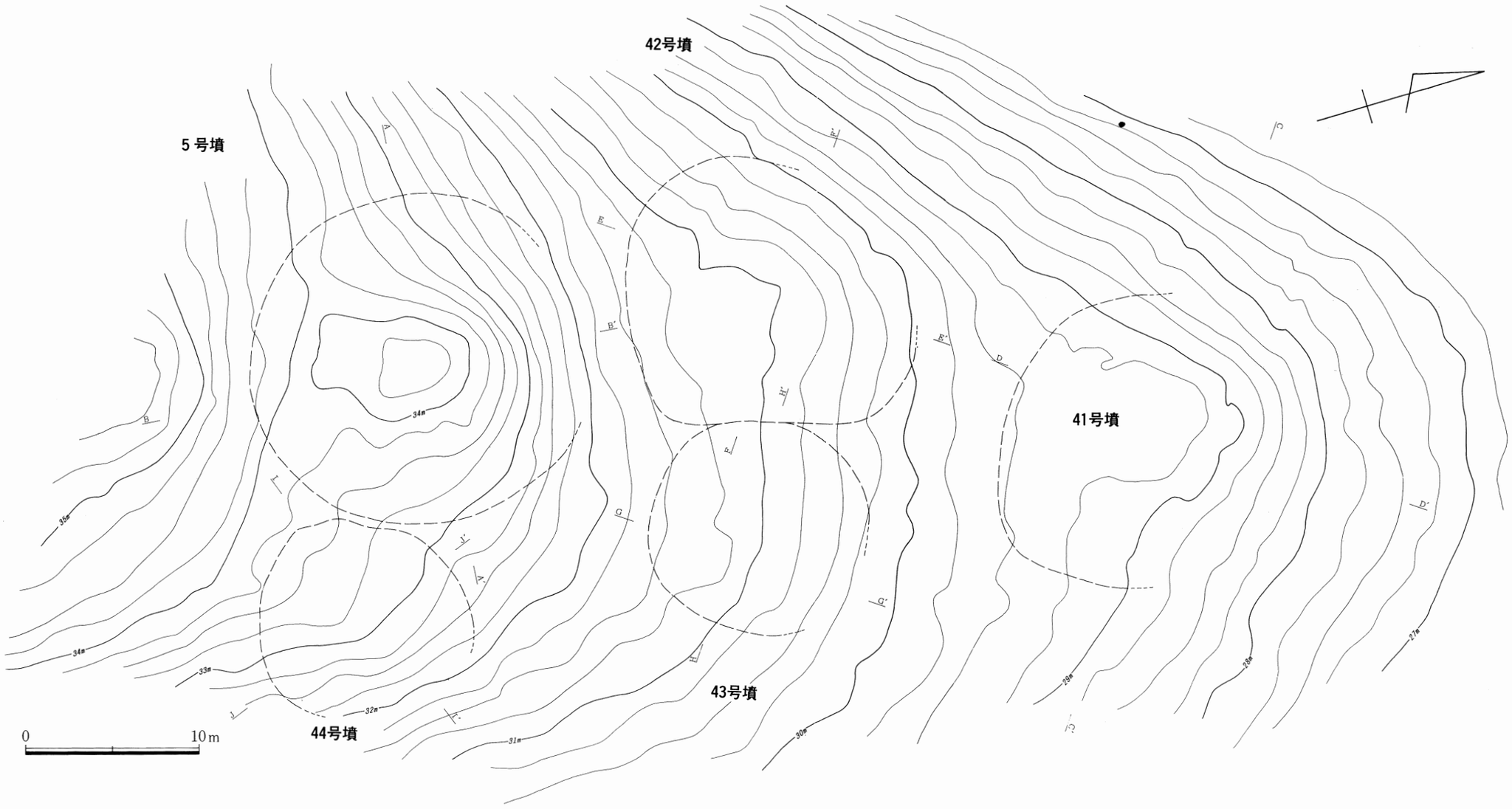
今回発掘調査を行なった5基の円墳は、空山山塊から派生する標高30ｍ前後の小丘陵上に立地し、谷部の水田との比高差は6～11ｍを測る。調査地の最高所に5号墳が位置し、41号墳が丘陵先端の低地に位置する。古墳の配置を見ると5号墳と44号墳、42号墳と43号墳は周溝を接するように築造されており、それぞれ墳丘規模も直径16ｍ、12ｍの大小で対となっている。なお、41号墳も径16ｍを測り墳丘の平面規模に規則性が認められる。

墳丘は、後世の流失・削平によって完全に遺存しているものはなかった。いずれも丘陵上部(南側)に中心を置く弧状の周溝によって区画されており、盛土と地山の掘削・加工によって墳丘が造られている。周溝は、比較的平坦な丘陵上に古墳が立地するためか幅、深さとも規模が大きい。盛土は周溝掘削時の排土等を利用したものと考えられ、5号墳では最大厚0.9ｍを測る。周溝から推定できる墳丘の平面規模は、直径16ｍ、直径12ｍの二種があり、前者が3基(5,41,42号墳)後者が2基(43,44号墳)である。本来の墳丘高は不明だが、比較的墳丘盛土の残っていた5号墳の埋葬施設の深さなどを勘案すれば、北側墳丘裾部からの見かけの高さは3ｍ程度はあったものと考えられよう。埋葬施設は、5、42号墳から各１基検出するにとどまった。

調査古墳に伴う遺物として、埋葬施設及び周溝底部から出土した土師器、須恵器、鉄器類がある。このうち41号墳周溝から出土した須恵器は、鳥取市内では古く位置付けられるもので、近くの越路窯跡群七谷堤窯との関係が考えられるが、今後の検討課題であろう。

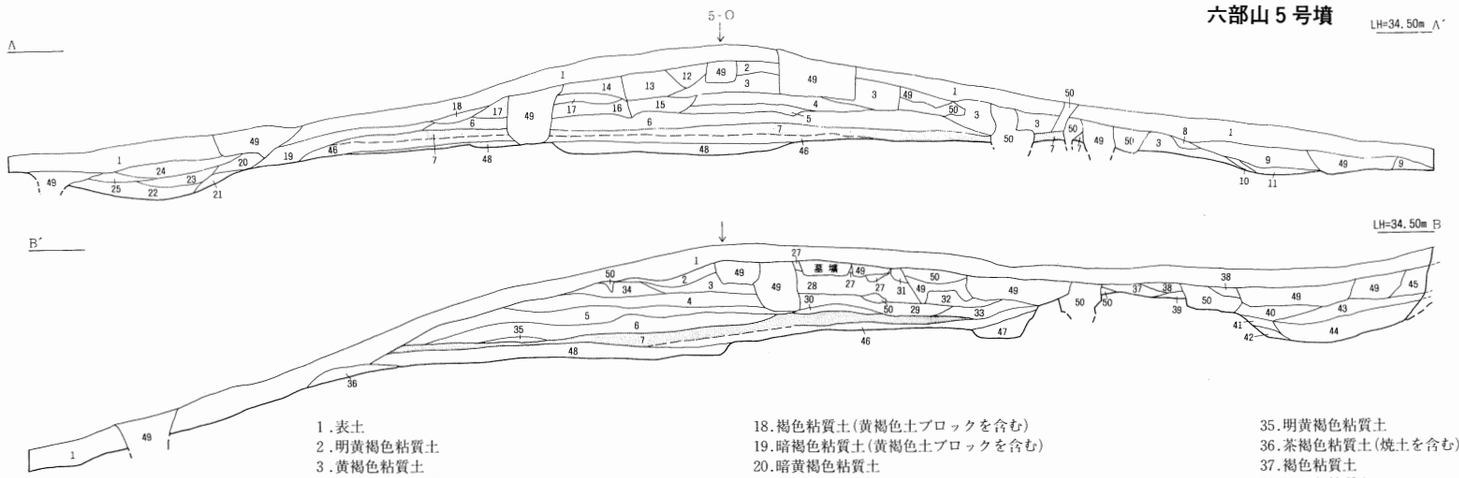
さて、これら古墳の築造時期であるが、出土遺物、墳形、築造方法、埋葬施設等の様相から古墳時代中期後半に相ついで築造されたものと考えられる。なお、出土遺物の年代観では５号墳、41号墳、42号墳の築造順となるが、それぞれの遺物の出土位置が異なっており、必ずしも当初の築造時期を忠実に示しているものとは考えがたい。細かい古墳ごとの前後関係、相互の社会的な関係性等は今後の検討に委ねたい。

古墳築造前の遺構として、掘立柱建物とこれに伴う溝状遺構、段状遺構、土坑などを検出した。掘立柱建物には主軸方位、柱穴規模などからＳＢ01・ＳＢ02・ＳＢ03とＳＢ04・ＳＢ05の2時期のものが認められ、前者が弥生時代後期後半、後者が古墳時代前期に比定される。ＳＢ03に見られる布堀り構造は、近くの久末・古郡家遺跡の掘立柱建物でも確認されており、この地域の弥生時代掘立柱建物を考える上で注目に値しよう。なお、これらの建物の性格、他の遺構との関係等ついては、今後に期したい。



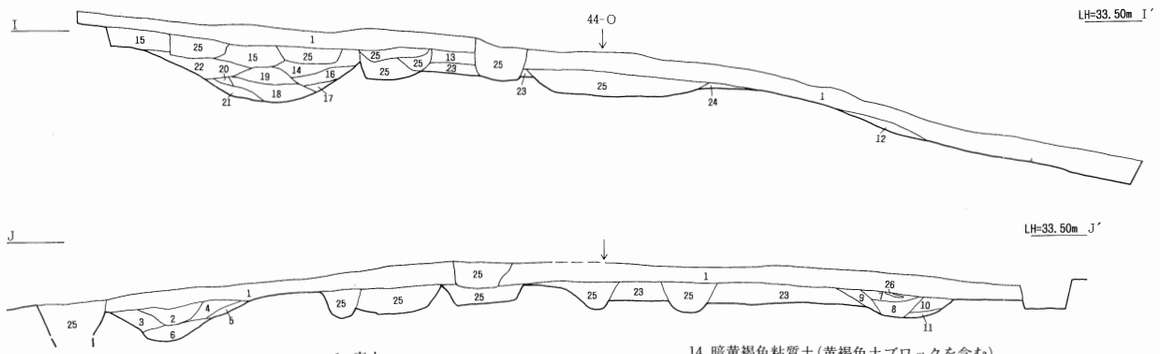
第17図　六部山41・42・43・44・５号墳地形実測図

六部山５号墳



1.表土
2.明黄褐色粘質土
3.黄褐色粘質土
4.黄褐色粘質土(明黄褐色土、黒灰色土ブロックを多く含む)
5.黄褐色粘質土(４より明，明黄褐色土ブロックを多く含む)
6.暗褐色粘質土(明黄褐色土ブロックを多く含む)
7.黒灰色粘質土(旧地表)
8.褐色シルト(やや粘質)
9.暗褐色粘質土
10.褐色粘質土
11.灰褐色粘質土
12.明黄褐色粘質土
13.黄褐色粘質土
14.黄褐色粘質土(13よりやや明)
15.暗黄褐色粘質土(明黄褐色土、黒灰色土ブロック点在)
16.明黄褐色粘質土
17.暗黄褐色粘質土(黒灰色ブロックを多く含む)
18.褐色粘質土(黄褐色土ブロックを含む)
19.暗褐色粘質土(黄褐色土ブロックを含む)
20.暗黄褐色粘質土
21.暗灰色粘質土
22.黒褐色粘質土
23.黒灰色粘質土
24.暗褐色粘質土(黄褐色土ブロックを多く含む)
25.暗灰色粘質土(黄褐色土ブロックをわずかに含む)
26.明黄褐色粘質土
27.暗褐色粘質土
28.黄褐色粘質土(明黄褐色土ブロックを含む)
29.暗黄褐色粘質土(黒灰色土ブロックを含む)
30.暗灰色粘質土(黄褐色土ブロックを含む)
31.明黄褐色粘質土
32.黄褐色粘質土(28より暗)
33.黒褐色粘質土(黄褐色土ブロックを含む)
34.暗黄褐色粘質土(黒灰色土、明黄褐色土ブロックを多く含む，盛土)
35.明黄褐色粘質土
36.茶褐色粘質土(焼土を含む)
37.褐色粘質土
38.暗褐色粘質土
39.暗灰色粘質土
40.暗黄褐色粘質土(黄褐色土ブロックを多く含む)
41.暗褐色粘質土
42.暗灰色粘質土(強粘質)
43.暗褐色粘質土(強粘質)
44.黒褐色粘質土
45.黒褐色粘質土(黄褐色土ブロックを含む)
46.灰黄褐色粘質土
47.褐色粘質土(土器片、炭化物、地山礫を含む，土坑)
48.褐色粘質土(土器片、炭化物を含む)
49.肥料穴・溝
50.根及び根による攪乱土

六部山44号墳

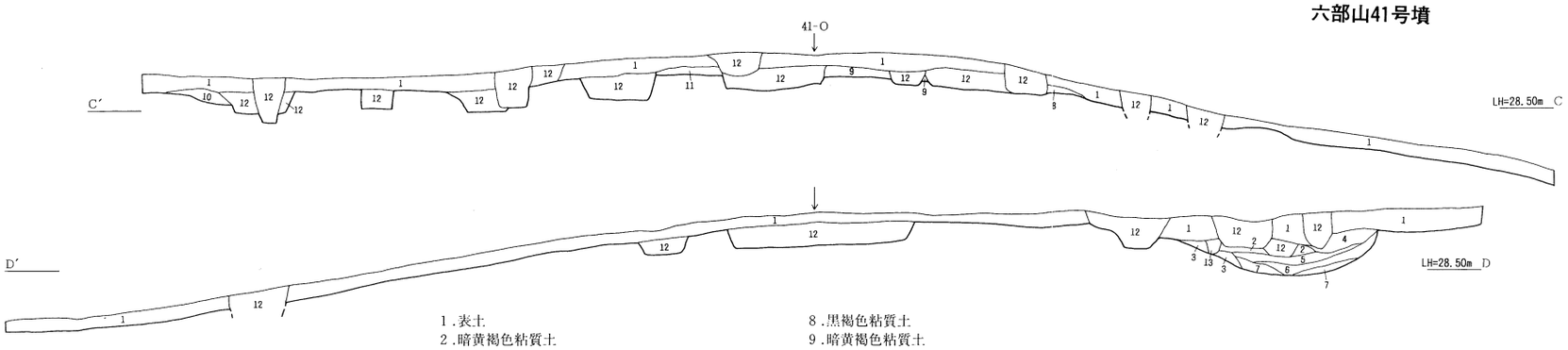


1.表土
2.暗黄褐色粘質土
3.暗褐色粘質土
4.暗褐色粘質土
5.黄褐色粘質土(黄褐色土ブロックを含む)
6.褐色粘質土(黄褐色土ブロックを含む)
7.暗褐色粘質土(黄褐色土ブロックを含む)
8.黒褐色粘質土
9.灰褐色粘質土
10.暗灰褐色粘質土(黄褐色土ブロックを含む)
11.暗灰色粘質土
12.暗褐色粘質土
13.暗褐色粘質土
14.暗黄褐色粘質土(黄褐色土ブロックを含む)
15.暗褐色シルト(やや粘質)
16.褐色粘質土
15.暗褐色粘質土
18.黒褐色粘質土
19.暗灰色粘質土
20.暗灰色粘質土
21.灰褐色粘質土
22.暗褐色シルト(黄褐色土ブロックを含む)
23.暗褐色粘質土(黄褐色土ブロックを含む)
24.褐色粘質土
25.肥料穴・溝
26.根及び根による攪乱土

0　4 m

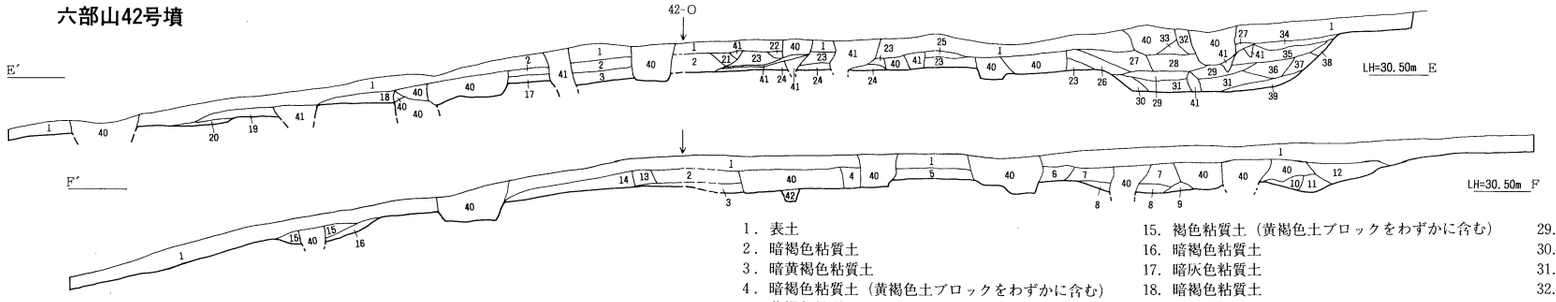
第18図　六部山５・44号墳墳丘断面図

六部山41号墳



1.表土
2.暗黄褐色粘質土
3.褐色粘質土
4.褐色粘質土(黄褐色土ブロックをわずかに含む)
5.暗褐色粘質土
6.暗灰色粘質土(黄褐色土ブロックをわずかに含む)
7.暗黄褐色粘質土
8.黒褐色粘質土
9.暗黄褐色粘質土
10.暗灰色粘質土
11.暗黄褐色粘質土
12.肥料穴・溝
13.根及び根による攪乱土

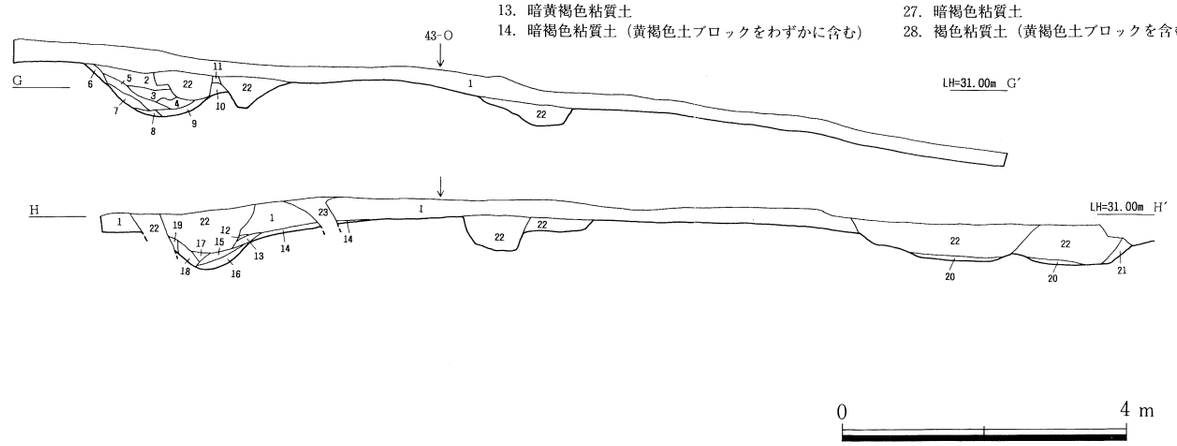
六部山42号墳



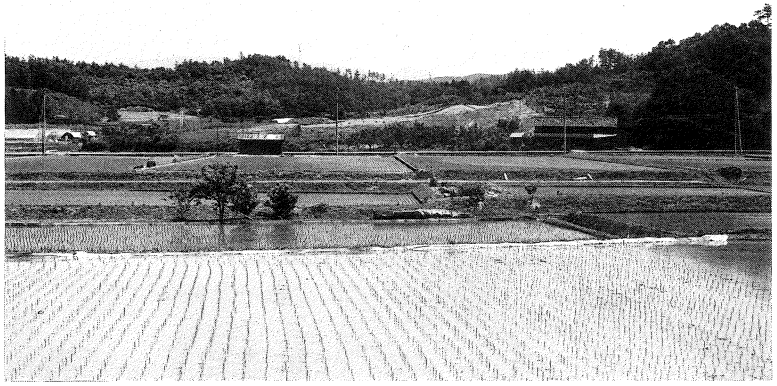
1. 表土
2. 暗褐色粘質土
3. 暗黄褐色粘質土
4. 暗褐色粘質土（黄褐色土ブロックをわずかに含む）
5. 黄褐色粘質土
6. 暗褐色シルト（根による攪乱）
7. 褐色粘質土（黄褐色土ブロックを含む）
8. 暗茶褐色粘質土
9. 暗灰色粘質土
10. 暗黄褐色粘質土
11. 暗灰色粘質土（黄褐色土ブロックを含む）
12. 褐色粘質土（黄褐色土ブロックを含む）
13. 暗黄褐色粘質土
14. 暗褐色粘質土（黄褐色土ブロックをわずかに含む）
15. 褐色粘質土（黄褐色土ブロックをわずかに含む）
16. 暗褐色粘質土
17. 暗灰色粘質土
18. 暗褐色粘質土
19. 暗褐色粘質土
20. 褐色粘質土
21. 黄褐色粘質土
22. 黄褐色粘質土
23. 暗褐色粘質土（黄褐色土ブロックを含む）
24. 褐色粘質土
25. 褐色粘質土（黄褐色土ブロックを含む）
26. 暗黄褐色粘質土
27. 暗褐色粘質土
28. 褐色粘質土（黄褐色土ブロックを含む）
29. 灰褐色粘質土（黄褐色土ブロックを含む）
30. 暗灰色粘質土
31. 暗灰色粘質土（３０より暗、黄褐色土ブロックを含む）
32. 黄褐色粘質土（攪乱土）
33. 暗褐色粘質土（攪乱土）
34. 暗褐色粘質土
35. 暗黄褐色粘質土
36. 褐色粘質土（黄褐色土ブロックを含む）
37. 灰褐色粘質土（黄褐色土ブロックを含む）
38. 褐色粘質土
39. 暗褐色粘質土（黄褐色土ブロックを含む）
40. 肥料穴・溝
41. 根及び根による攪乱土
42. 柱穴

六部山43号墳

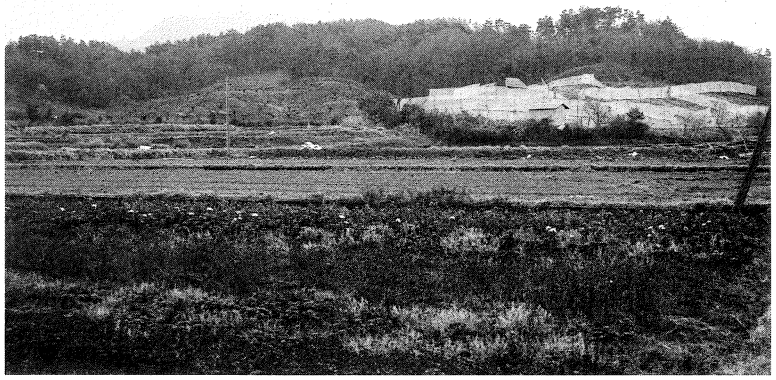
1.表土
2.暗褐色粘質土
3.黒褐色粘質土
4.灰褐色粘質土(黄褐色土ブロックをわずかに含む)
5.暗灰褐色粘質土
6.黄褐色シルト
7.褐色粘質土
8.黒褐色粘質土
9.褐色粘質土(黄褐色土ブロックを多く含む)
10.褐色粘質土
11.暗褐色シルト
12.暗灰色粘質土
13.暗褐色粘質土(黄褐色土小ブロックを含む)
14.茶褐色粘質土
15.黒灰色粘質土(黄褐色土ブロックをわずかに含む)
16.暗褐色粘質土
17.褐色粘質土
18.褐色粘質土(17より弱粘質，黄褐色土ブロックを含む)
19.黒褐色粘質土
20.暗灰色粘質土
21.暗褐色粘質土
22.肥料穴・溝
23.根及び根による攪乱土



第19図　六部山41・42・43号墳墳丘断面図

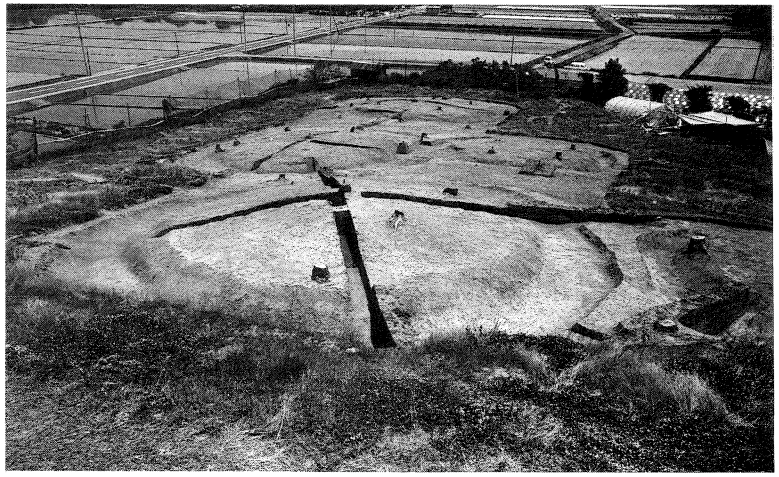


1．調査地遠景（北西から）



2．調査地遠景（北から）

3．調査前の調査地全景（南から）



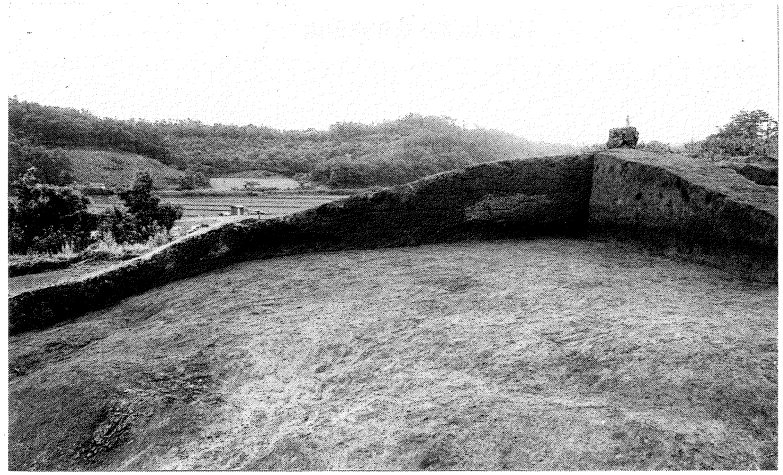
4．調査地全景（南から）

図版1

図版２

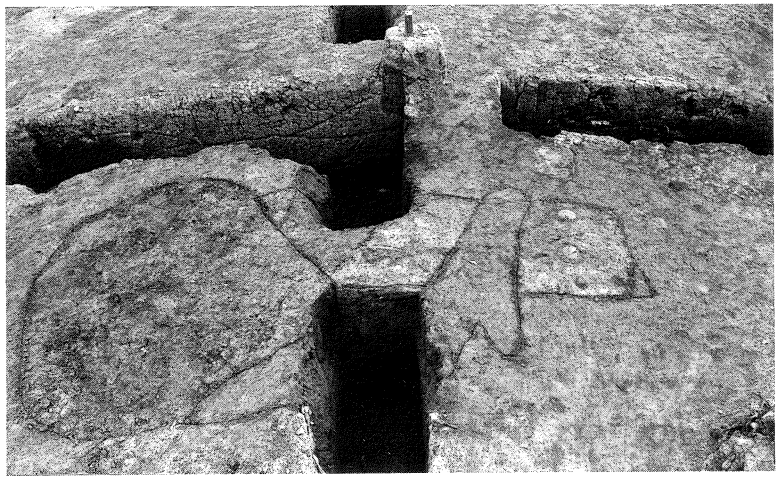
１．六部山５号墳 調査前（北東から）

２．同　調査後（南から）

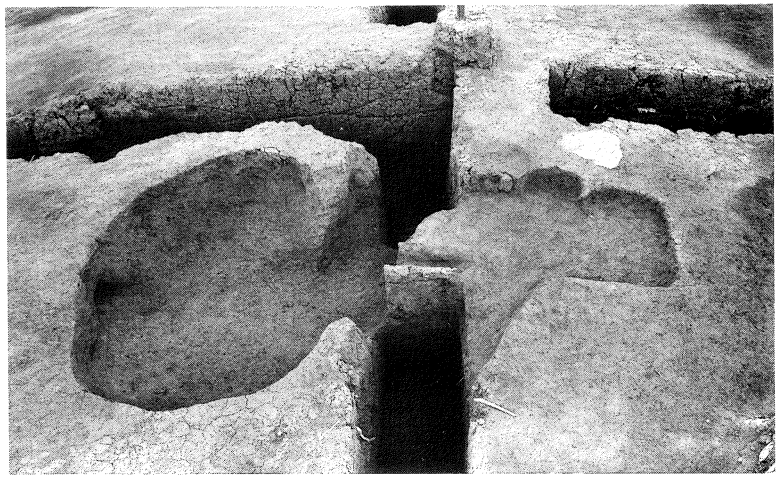


３．同　墳丘断面（西から）

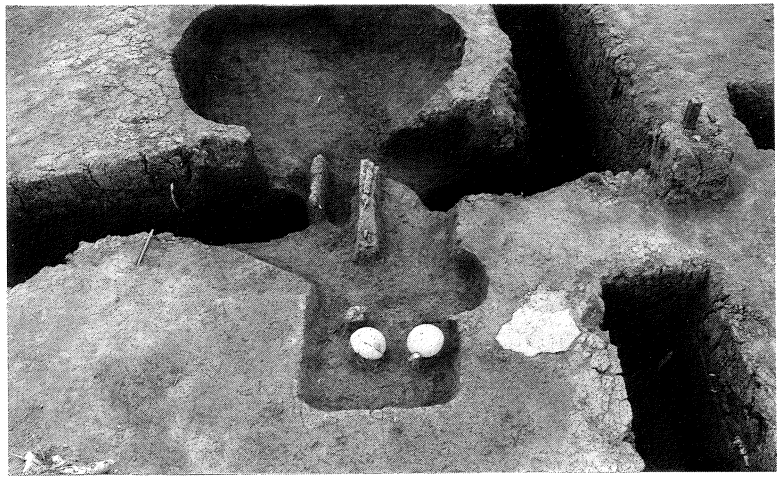
４．同　周溝埋土状況（南から）



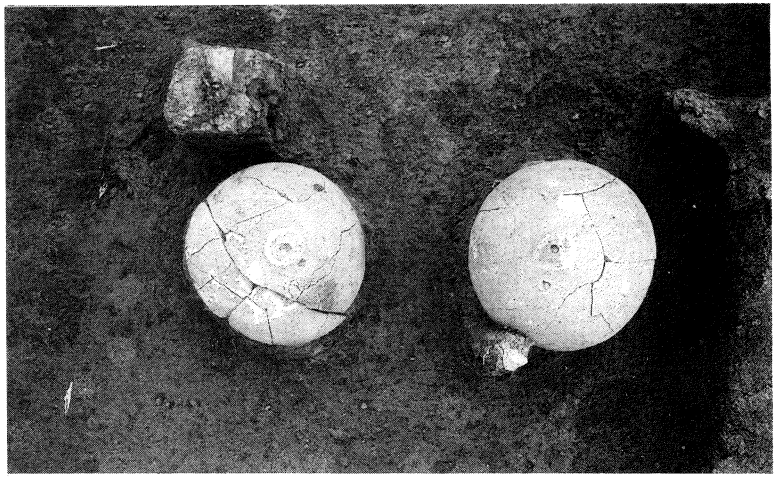
1．六部山５号墳 埋葬施設検出状況（南から）



2．同　埋葬施設完掘状況（南から）



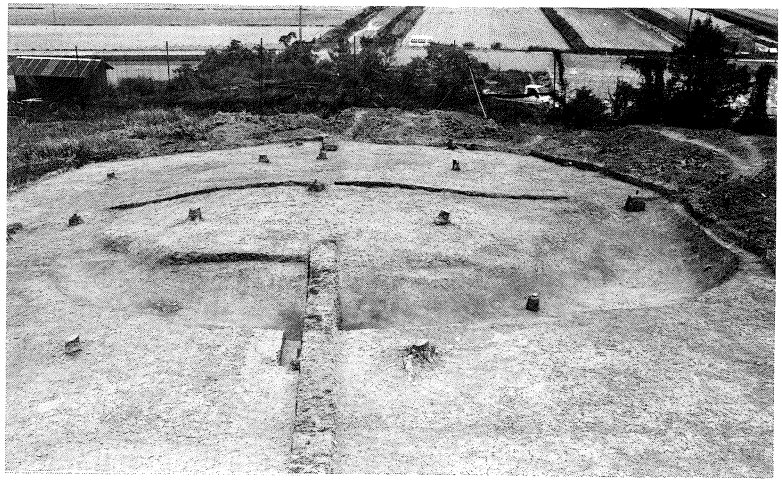
3．同　埋葬施設内遺物出土状況（東から）



4．同　埋葬施設内遺物出土状況部分（東から）

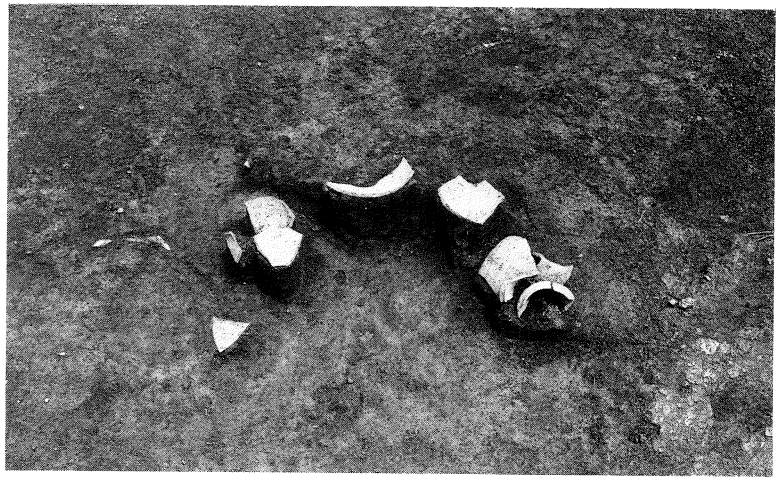
図版３

1．六部山41号墳 調査前（東から）



2．同　調査後（南から）

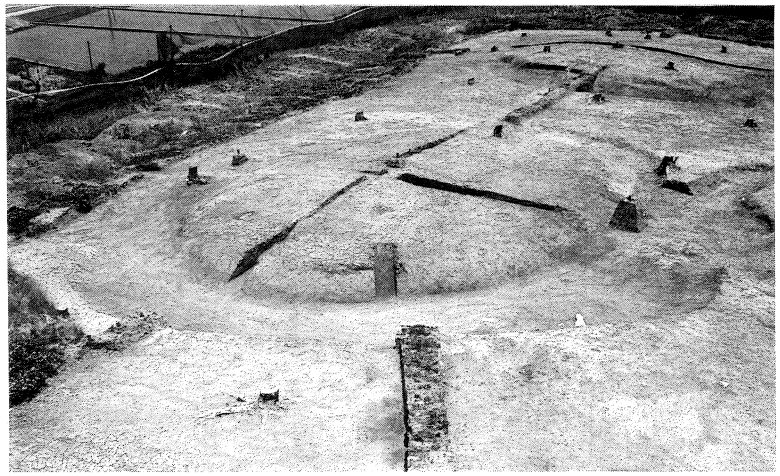
3．同　周溝埋土状況（西から）



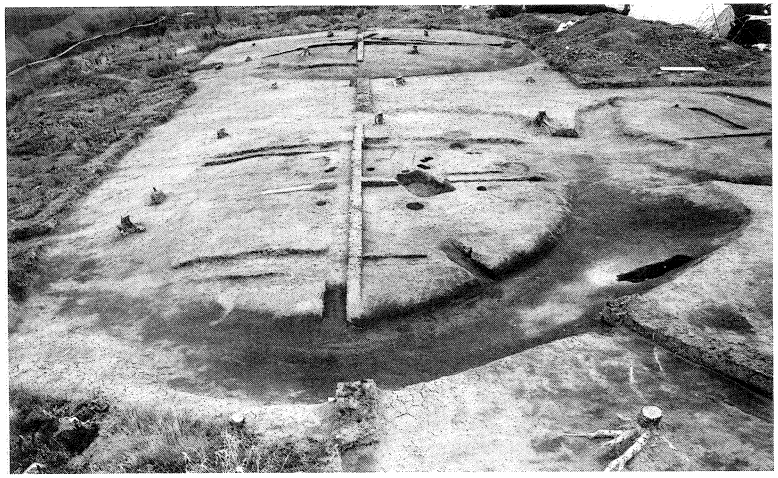
4．同　周溝内遺物出土状況（南から）

図版4

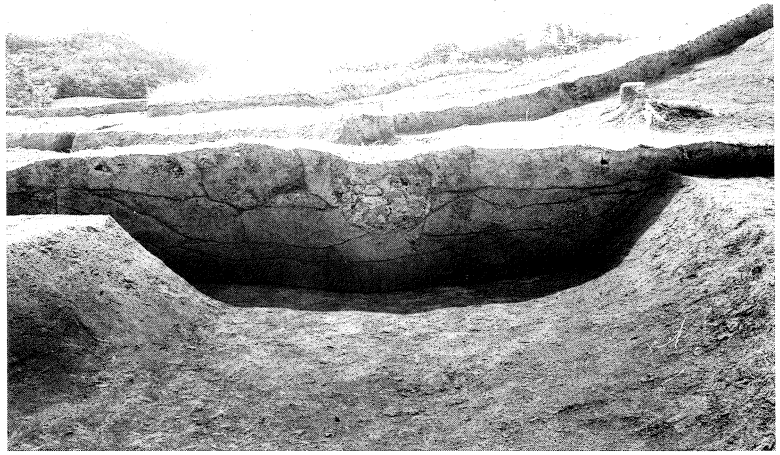
1．六部山42号墳 調査前（南東から）



2．同　墳丘、周溝検出状況（南から）

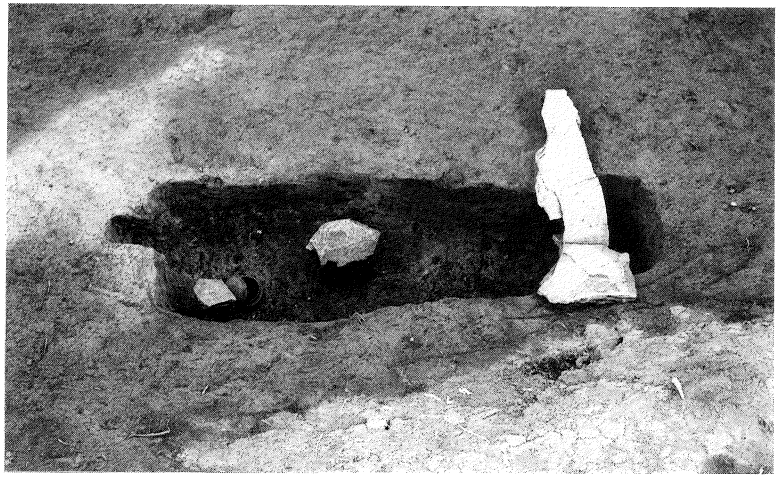


3．同　調査後（南西から）

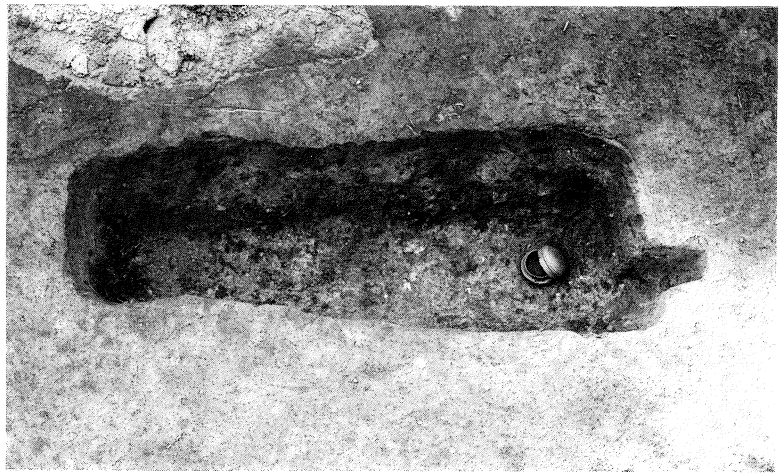


4．同　周溝埋土状況（北西から）

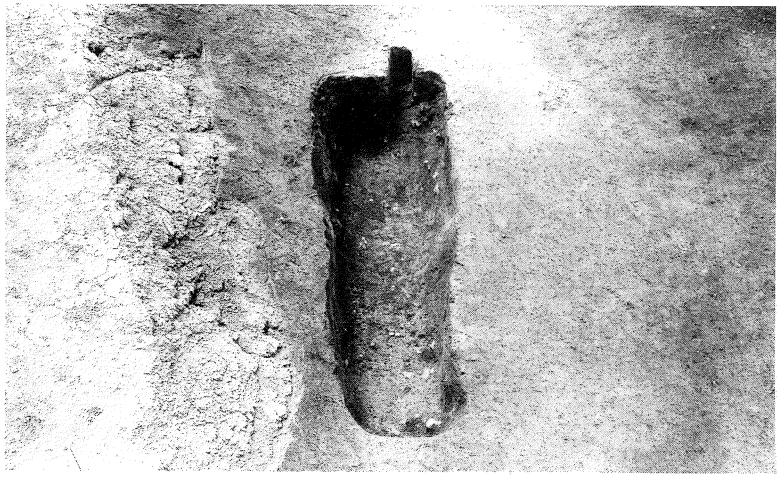
図版5



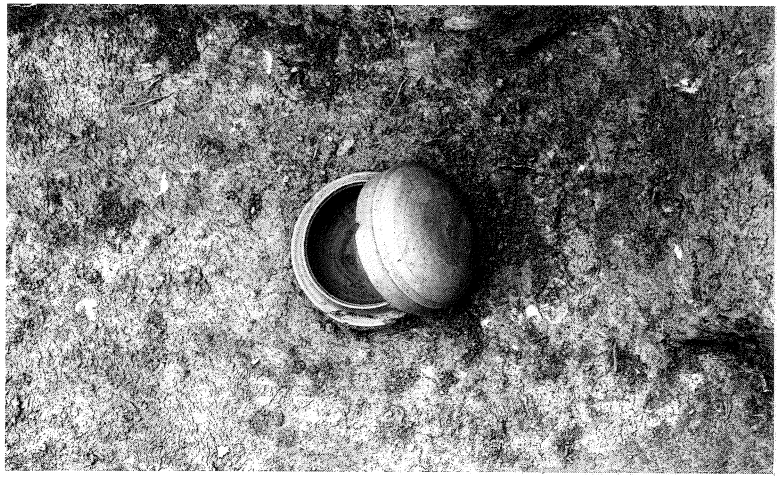
1．六部山42号墳 周溝内埋葬施設（南から）



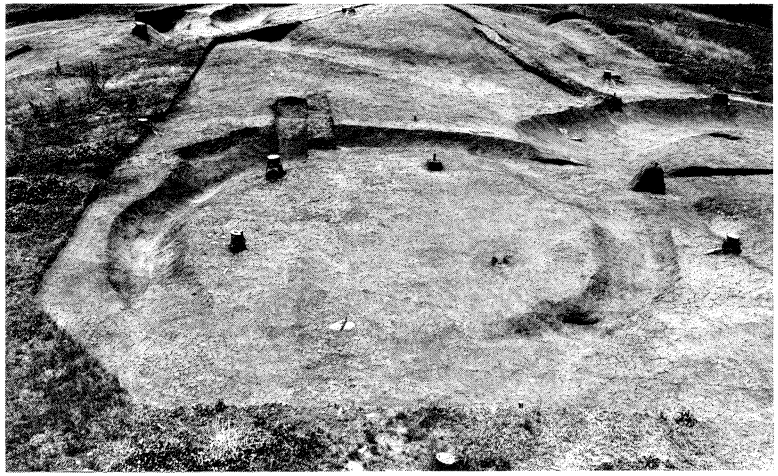
2．同　周溝内埋葬施設（北から）



3．同　周溝内埋葬施設完掘後（東から）



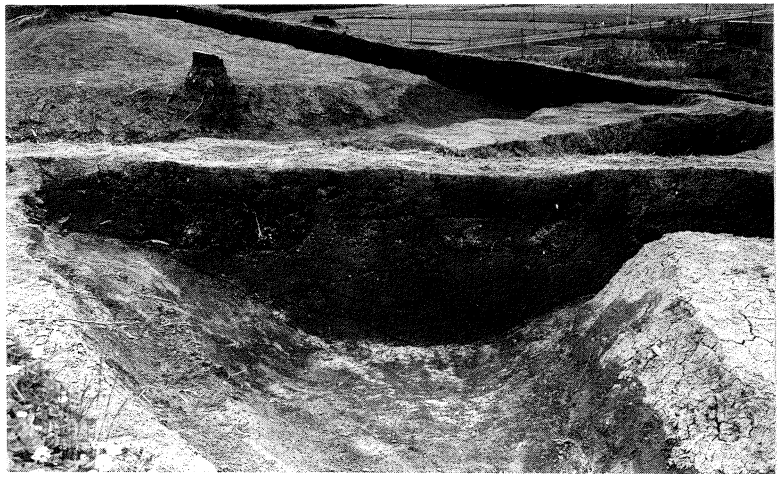
4．同　周溝内埋葬施設遺物出土状況（北から）



1．六部山43号墳 調査後（北から）

2．同　周溝埋土状況（北から）

3．六部山44号墳 調査後（北西から）



4．同　周溝埋土状況（東から）

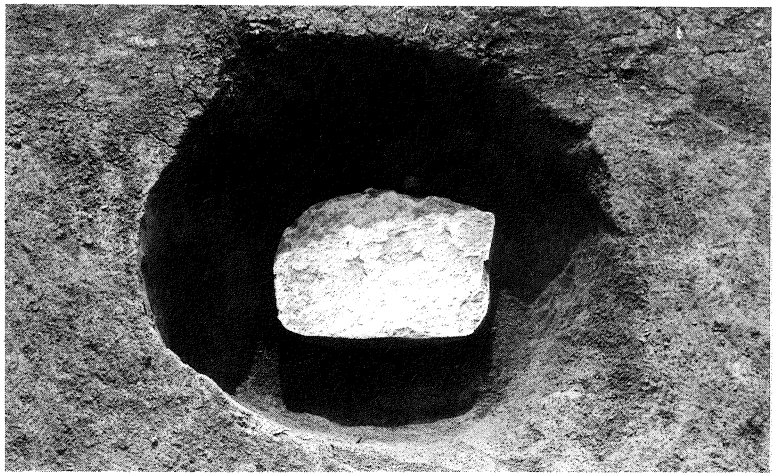
図版 7

1．六部山５号墳 墳丘下遺構全景（南から）

2．同（東から）

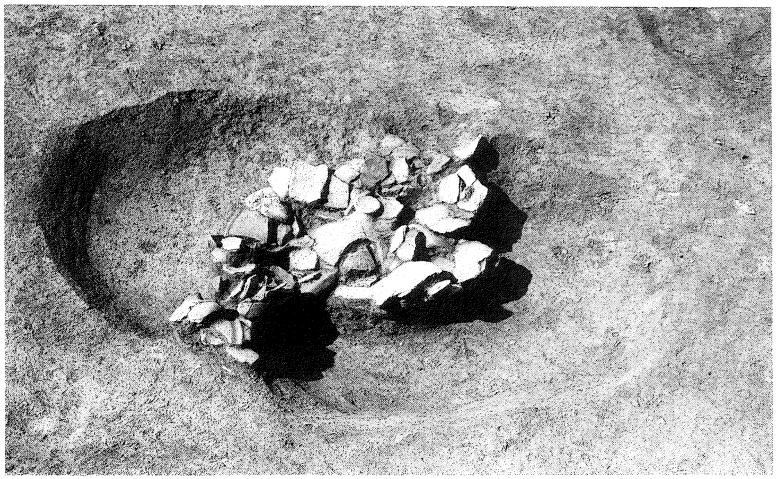
3．SB01（南東から）

4．SB02、SB03（南東から）



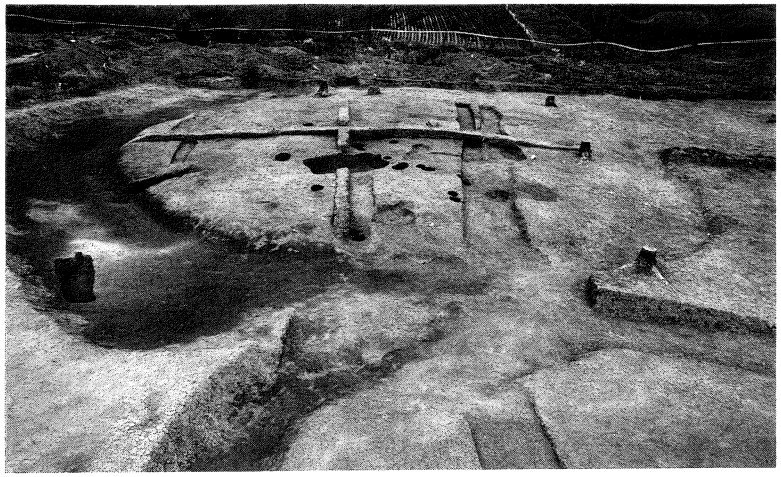
1．SB03-P 4 検出状況（北から）

2．SB04（東から）

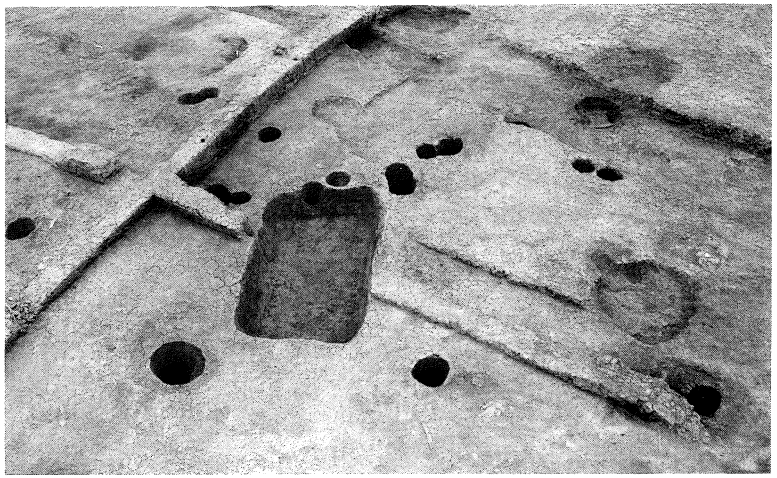


3．SK02（南から）

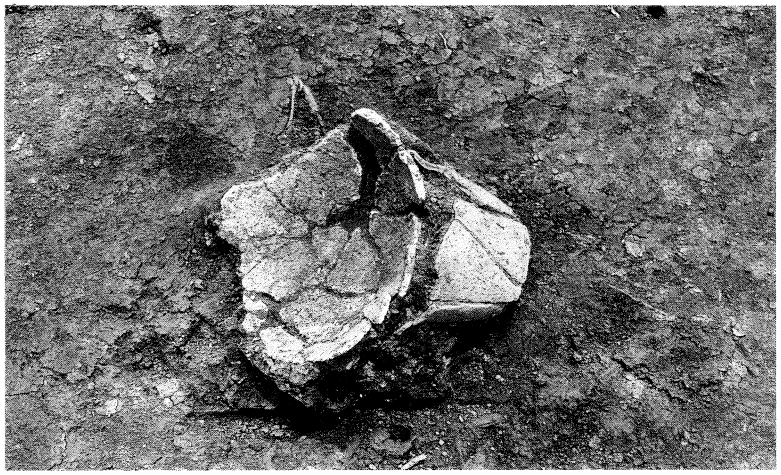
4．SK02 遺物出土状況部分（北から）



1．六部山42号墳 墳丘下遺構全景（南東から）

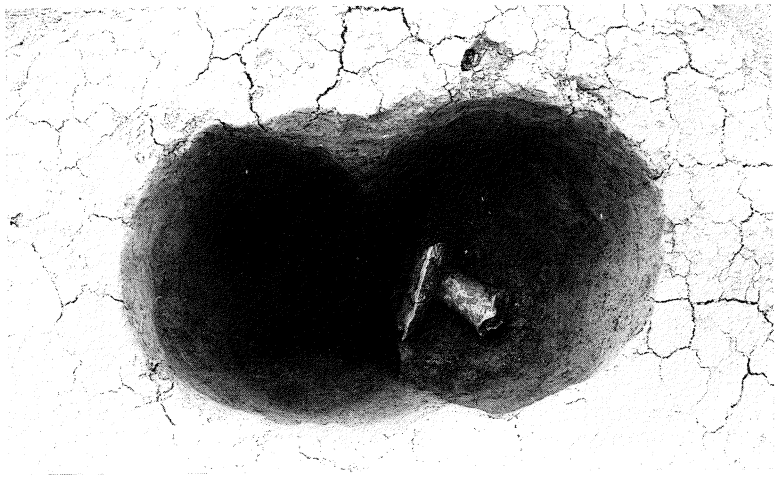


2．SB05、SK05（南から）

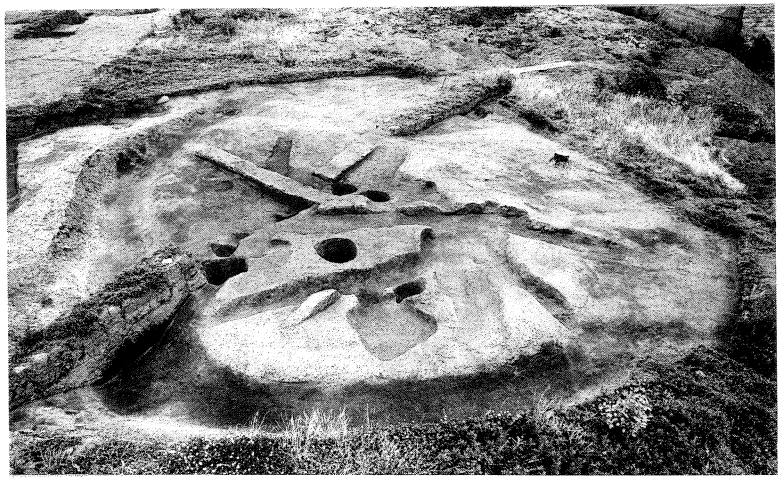


3．六部山42号墳 墳丘下遺物出土状況 (1)

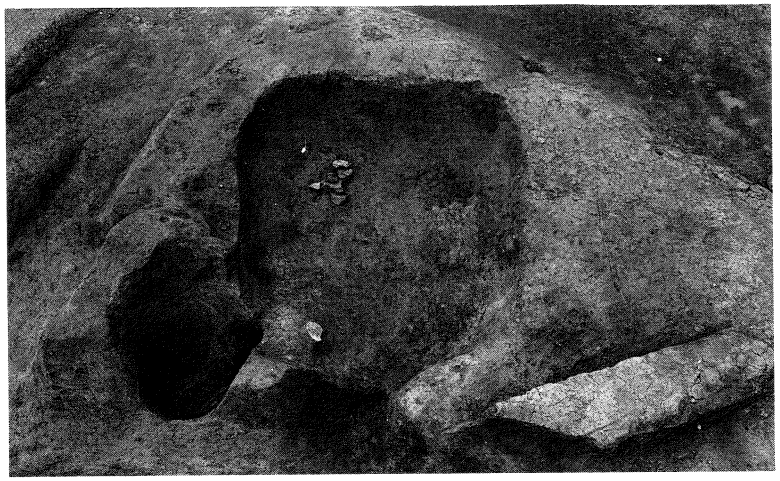
4．同 (2)



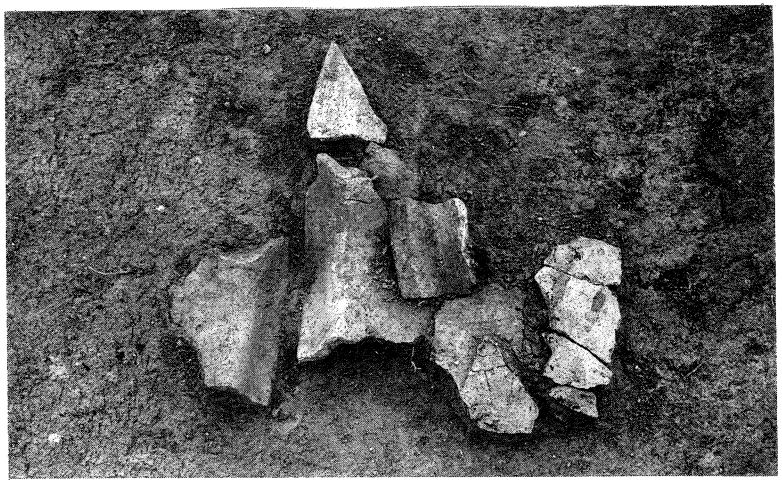
1．六部山42号墳 墳丘下柱穴検出状況



2．六部山44号墳 墳丘下遺構全景（南西から）



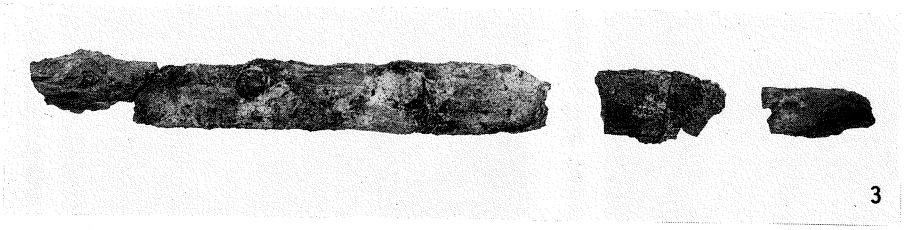
3．SK01（北から）

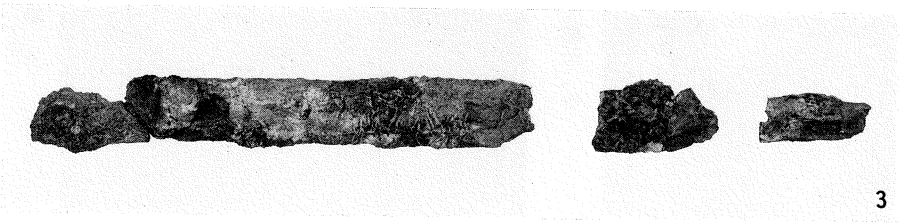


4．同　遺物出土状況部分（東から）

図版11

図版12

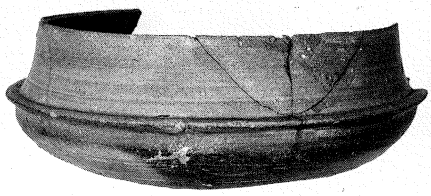




1．５号墳埋葬施設出土高杯（第７図１）
2．　　同　　（第７図２）
3．　　同　　鉄刀（第６図１、２、３）
4．　　同　　鉄製品（第６図４）
5．５号墳周溝出土高杯（第７図３）
6．　　同　　蓋　（第７図５）
7．５号墳肥料穴内出土鉄刀（第６図５）

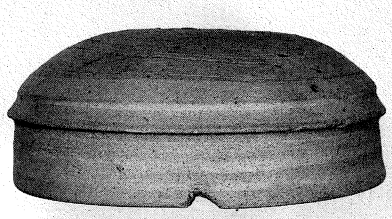
1

2



3

4



5

6

1．41号墳周溝出土蓋（第９図１）
2．　　同　　瓶（第９図２）
3．　　同　　杯（第９図６）
4．　　同　平瓶（第９図９）
5．42号墳周溝内埋葬施設出土蓋（第１１図１）
6．　　同　　杯（第１１図２）

六部山古墳群発掘調査概要報告書

－六部山5・41・42・43・44号墳の調査－

平成３年３月　印刷・発行

編集・発行　鳥取市教育委員会

印　　刷　㈱矢谷印刷所